

御縁をもとめて、聞て貴み見て敬ひ、たゞ往生の一大事は、最初歸命の一念おて、佛の方より治定なさしめ下さるゝとあれは、こゝに疑ふ所以はないとよたゞこの上にはねつをさつ御恩を念じ、晝の忙かしき中にも夜の寐覺おも、思ひ出しての繰返し巻返し南無阿彌陀佛く

(第四) 好異の弊を奪ふ辨

さて眞宗の僧俗の中お於て、清淨持戒と看板を出したる他宗の高僧方も耻しからぬ、身操たゞしき行狀殊勝の人もあるものおて、假も家内に生たる魚鳥の料理をさせぬは勿論のこと、蛤卵の類までも、他お喫さへ悲く瘍み毎月兩度の御命日の申すに及はと、先祖家屬の忌日潔齋、まつ朔日の父の日なり、二日は實如上人眞如上人、三日は天親菩薩、四日の如信上人、五日の教如上人、六日は住如上人、七日は曇鸞和尚良如上人、八日は寂如上人湛如上人、九日は吾が母の日、十日は源信和尚。十一日は從如上人、十二日は一如上人、十三日の證如上人、十四日は巧如上人琢如上人、十五日は釋迦如來

○好異 人
お異なること
をさきこ
のむと云

○忌日 命
日のと
○潔齋 魚
鳥等の肉及
五辛などを
食せざるを
云

○除夜 十
二月三十一
日を云

十六日は祖父の日なり、十七日は祖母の日なり、十八日は龍樹菩薩存如上人十九日は覺如上人、廿日の兄の日廿一日の姉の日、廿二日の聖徳太子常如上人、廿三日は伯父の日なり、廿四日の綽如上人顯如上人、廿五日は法然上人蓮如上人また其上に宣如上人、廿六日は伯母の日、廿七日は道綽禪師善導大師、廿八日は祖師聖人廿九日は善如上人、晦日は准如上人など、三十日の三十日おみなそれくの名をつけて、今日も精進明日も精進これも恩を受けた伯父なり、それも世話に成た伯母なり、かれは大恩教主の釋迦如來これは三國傳來の七高僧、況んや血脈相承の善知識の御命日、實お御恩と思ひ、精進潔齋つゝしみふかく、花をもさゞけ香をもそなへて、御敬ひの申す筈とど、佛前は毎日掃除華も毎日たてかへて元朝から除夜まで、肴陰日は一日もなく化に寐る夜は一夜もなし、晨朝迄夜の勤行も、一座かければ氣に掛り、香華灯明の御供養も、鹿相おすれば心かそます、他へ出る時は持佛の御前へ暇乞ひ、外より歸ればそのまゝ御禮お御佛前、念佛も高聲お、人の見目も自

○懃重 ねんごろに重ね
ずること

ら、殊勝涙も溢るゝのかり、ちよつと御禮をとげるも、御本尊から祖師前
から御代前から七高僧まで、あちらへ移りこちらに坐し、やゝ半時も一時も、
際に入るに氣もつかず、打仰ぎひれ伏て、懃重丁寧の恭敬合掌、たゞ假初ふ
も無益の物語をせず、婦人女子を相手にしても法義咄、道を往ふも衣肩衣、
手に珠數を離さねば口念佛の聲絶す、まことに眞宗律とも名くへき人柄か、
當世處々に流行なり、これはまこと有難きことなり、兎ても角ても我等と
どきの悪人は、心ろのさはと行届く日はあるまじければ、責ての姿形ふ
なりとも、恭敬無餘長時無間ふつとめたきものである、かく思ひ立ちなば、
舜何人ぞわれ何人ぞ、彼も人なり我も人なり、何とぞ負じ劣らじと、奥齒嚙
め皮切炙をこらへる心ろに、つとめてはみても、世々久習の悪人ゆへ、兎角
三業不調ふして、末遂す忘易き我等が分野なり、かゝる劣機を第一助
けんとして起し玉ひた、五劫永劫の彌陀の願力、たのむ一念歸命の時、知らず
覺へざれども、往生の大事をあなたふて治定なましめ下され、放逸無懃のこ

○舜 道德
を教へし人
なり
○久習 長
々くせ付て
あると

○懃懃 ねんごろなり

の身をば、この儘ながら、娑婆より无尋の光明の中に、起臥を御免なさるゝ
と思へば、たゞ何となくそころ念佛はあらゝることじや、さあれば清淨
潔齋律義丁寧ふよく勤むる人々も、わが如き最劣懶墮の輩らも、佛智の不思
議ゆへ、同じ淨土の往生とあれば、強ち眞宗律と指さしせられ賞られ
たさいはれもなく、外儀の相は兎も角も、心ろの佛の徹鑑なれば、たゞ無慚
無愧のこの身を耻ぢ、蛤の食ふとも鰈は裂を見るに忍ひず、卵は味ふとも寐
鳥の首はしむへからず、伯父伯母の忌日は等閑なるとも、十五日の釋尊の
恩は思ひ出さへし、毎月七祖の精進の出來すとも、責て正月の廿五日、二月
の廿二日、三月の三日、三月の廿五日、三月の廿七日、四月の廿七日、六月
の十日、七月の七日、十月の十八日、此分はかりなりとも潔齋勤行せまはし
きものなり、爾れども、かならざるや異を好みて、これを功にたてこれを豎に
つきて、自を誇り他を誇ることあるへからず、たゞ人目ふたゞそたゞやうに
精進につとめ、世ととも懃懃に守りたきものしや、その場に當て同朋おの

○六根眼耳鼻舌口意なり

○家光徳川家第三代の將軍なり

く肉を食ひ、われは食ひをも人を恥しむへからず、その時に臨んで同行みなくこれを制せば、われの制せすとも他を難むへからず、兎角にわれこそと殊勝めかすとも、陰に御恩の報しやうはいかほともあるへきことなり、所詮佛法の中に於て、悪きことをして善きと云ふは、露はともなければ、かりも悪を遠ざけ且くも善に進みて、如來の御胸をいさゝかなりとも休奉りたきものじや、さすれば人は見すとも知らずとも、御佛こそよく御存じよと、朝夕佛を心ろの鏡ふかしたて、三業を潜め六根を攝して、已れを慎しみ他を導きて、同發菩提心往生安樂國の素懷をどげ奉るやうふいたしたきものなり

これに就て一つの物語あり、昔し家光公御鷹を好かせられて秋冬春になるまでは、大形三日にわけと御鷹野あそはされたとあるが、或時品川筋へならせられ、頃ハ霜月のことなりしふ、殊の外寒氣つよく、氷の張る所なし、爾るに御鳥飼の時分、鴨を御奉にて御合せなされてあれば、その鷹やにはに鴨

を御堀の中へ取て落し、氷の上のことなれば押て放すと、最早追付け放すへしと見たる所ふ、御徒衆の中より一人進出で、傾て氷の中へ飛込み、難なくかの御鷹を居、鴨も取済して、御堀を游きて上りしほどに、御供の衆中も皆々あされ、さても氣散しなる働らさかな、是は急度御褒美に預かり、御取立もあそはさるへしと申合ひたれども、いかゝのわけみや家光公、何の氣色もなく、別に御言もなふ打過玉ひ、さて翌年の冬、その御徒を御取立あそばされた、爾れどもその時もその御鷹を氷の中より取上たることは、御一言も仰せられず、よほど後に及んで、御夜咄の序ふ御意なさるゝやうは、先年氷の中へ鷹の落たるを、何某氣散じに氷の中へ飛込み、難なふ取て上りし時、譽たくは思ひしかども、そのまゝ譽てあらば、又續てひたと堀へ飛込むもの多かるべし、左あらば寒ゆるもの出来なんと思ひ、わざと譽ざりしぞと仰せられたとある、誠に名將の思召は、なかく下とし計ひ難きものと云ことを、或書の中ふ記して置ひた、いかさま是ハ尤のことなり、今もその如く、かの

○後世者
後生を願ふ
人を云

○是と思ひ
てよきこ
とと思ふ也

眞宗律とも云つべき行狀たゞしき後世者をも、我等風情が心ろからは、早速
佛祖の御褒美もありそうな様お思へど、なきおの定めてわけも有ふ、そこは
なかく計り知られぬ、つたなき我等が心ろにすら、譽たきことは譽たけれ
ども、譽兼るその子細は、これを全くよきことと云はる、愚かなる人々の、
追々ひたもの眞似をして、外儀の相おばかりかゝり、たゞ行狀の殊勝な
るのみ是と思ひて、却て宗意を失ふ輩もあらんかと、得譽は致さねども、阿
彌陀如來の酸も甘も御合点なれば、縦ひ今日御褒美のなくとも、追付臨終の
夕おは、大般涅槃の御取立に、間違ひのあるへき様のさらおない、纒か一世
の主君お仕へ奉るさへ、寒中お氷をわつて堀に飛入り、身のこゝゆるも厭は
そして、水を遊さし例もあるに、多生曠劫の佛恩師恩、眞實大切お思ひなは、
氷を踏み雪を分けても、報謝の營のなさて叶ぬ答のことなり

(第五) 疑計の弊を奪ふ辨

○一向宗
眞宗を他宗

行脚文集の中お、第三取意一向宗お易行易行と勸れども、易行にのあられて難行のた

より名て云
なり

○金光明
佛の經典の
名なり

○中道 諸
法の眞理な

○信外輕毛
五十二段
階位の中お
未だ十信の
位にも入ら
ざる輕毛の
如き凡夫を
云

いなかじや、その子細の口お南無阿彌陀佛と唱るところは、なるは易
行なれども、心ろに疑ひか有ては往生はかなはぬでないか、この疑ひが何と
晴らるゝものぞ、凡夫の身として、疑ひなく信を決定すると云ふことは叶は
ぬことじやと書てあるこれ尤至極の義なり、すてお金光明の文句にも自初
地至十地有別疑と示され、四明の記にも別疑障中道中道未極安得
不疑と釋せられて、初地の菩薩より十地の菩薩までも、みな別疑のうたか
ひは絶ぬものにて、所詮中道の證を開かぬうちは疑はすお居られぬものじや
とある、爾れば菩薩でさへ疑ひの根は尽ぬとあるもの、まして況んや信外輕
毛のあさましき凡夫か、吾手に疑ひを止ふと思ふたどて、何とて止むものぞ、
爾らばいかゞして此疑ひを晴るゝ答ぞと云ふ時に、佛智の不思議によらで
此疑ひの晴れられぬ、跡もなき雲お争ふことろこそ、中々月の障どいなれ
一遍と云ふ歌の通り、疑ひが有てはならぬ疑ひが有ていならぬ、此疑ひを何と
して晴らすことぞ、それはかやうの所以で斯る子細と云ふて、謂をたゞし

○法弱 修行お堪へざる心の弱きものを云

理を尋ねて、兎角疑ひをさつはりと晴れて掛らねばならぬと、かふ思扱ふて居るか、もう本願他方の障じや、かゝる疑深き私か爲の彌陀の本願、疑ひ深きこの身ながら、如來をたのみたてまつれば、如來本願の不思議を以て助けは一定ぞと、思詰て喜ぶばかりじや、そこを祖師聖人は、往生は何事も凡夫の計ひあらず、如來の御誓ひお任せ參らせられたはこそ他方にては候らへど御意なされた、しかれば最早一も二もない、我身の未來の一大事を、一念御助け候らへど當體に、如來へ旋と御預申奉るはかり、預人は法弱下劣の埒明すなれども、預主かたしかなる御佛ゆへ往生に間違ひのさらうくない、そてお經の中には、髮の毛一筋を百に分て、その一分を水お浸して掌の上お置お、忽ち見て居るうちお乾くものなれども、それを佛お預るお千劫万劫を経て失ひ玉はず、無量劫たちてもその水の乾くと云ふことはないとある、かゝる髓なる如來お預け置き奉るほどの往生に、何とて間違ひのあるへきを、助け玉ふは佛の所作念佛申すは我等か所作、すてに往生の佛の御所作な

○番大 番人也

○慮外 おもひの外と云こと
○穿義 詮義のこと考へるを云

るものを、兎角せんと思ふは計ひなり、爾れば佛の御所作とある一段を我機の方おて免や角やと思ふの公家の所作を番太がせんと云ふこと、法談するは坊主の所作、聞て喜ぶは各々の所作それを各か兎して角してと、法談のことを心の苦にせらるゝは入らざる慮外と云ふもじや、所詮往生の一段を我等が方にて彼此と計ひ、評定穿義したてをしては、千日千夜の談合にても埒の明日はなひ程に、我身の無始流轉の凡夫、無有出離の捨果なれども、頼にだおそれは御助けと、佛智の不思議を頼みおして、稱名相續するより外いなひ、そこを祖師聖人も、佛智疑ふ罪深し、この心おもひしるならば、悔るこゝろをむねとして、佛智の不思議をたのみへしと御意なされて、今まで生々世々の間に於て、三恒河沙の諸佛出世の所おて、この大法の御謂を聞たこともありつれども、他方と云ふことを疑ふて、成りもせぬ自力の菩薩お掛て居たゆへ、ながく流轉の凡夫となりたることなれば、今は早や誤り果て、あゝさて疑ふまじき御本願を疑ひしことの淺ましやと、悔む心ろをむねとし

て、偏ひとへ佛智ぶつちの不思議ふしぎを頼たのみ、頼たのむ衆生しゆじやうを佛ぶつけおせそは我われれの正覺しやうかく取とらしとある彼方あなたの願力ねんりきが手強てつよゆへふ、生なるまじきものゝ生なるゝが、佛智ぶつち不思議ふしぎの顯あらはてなれば、たゞ一筋ひとぢふこゝの所ところをたのもしく思おもふて御報謝ごほうしゃの南無なむあみた佛ぶつ（第六） 放逸ほういつの弊へいを奪うばふ辨せん

○秋霜 白
髪のこと
○江戸 今
の東京なり

總すべして後世ごせいの大事だいじを大事だいじとも思おもはそ、たゞ放逸ほういつのみ年月ねんげつを送おくる人は、第一だいいち死しぬると云いふことを辨わ知ちぬゆへなり、なるほど、自みづかも、他たも此年このとしは幾いくつふなる來年らいねんは幾いくつぞと云いふ、我年わがとしを知らぬものはなけれども、不ふ知明鏡ちめいきやう裏何處うらかた得え二秋霜あきしもと唐たうの李白らいぱいが詩しに作りし如ごとく、たまゞ鏡かみみ向むかて見みれば、よその人ひとかと思おもふ、位くらに面形おもてがたか古ふるひても、追付おひ死しぬる下拵しもと、心こゝろもつかと、白毛しろがが一筋ひとぢ生なたなら、それを閻魔えんまの使つかひと知して、後生ごせいを急いそげとあるけれども何なにとしたやら耳みみが聞きへぬ、いかなる所以ゆゑやら目めが見みへぬと、云いひつゝ菩提ぼだい進すすむ氣きもなく、狭せまき日本にっぽんの内うちてさへ、頓とんの内うち京きやうのほらふ江戸えどを行いかふと思おもふ時ときのそれのくゝの用意ようい支度しどあるものなるに、明日あすをも知しれぬ露つゆの命いのちを持もたながら、

○深自 斯
々の文字なり

未來みらいの旅たびの用意よういをせぬ、あるへきことゝも思おもひぬ、得えと思案しよあんをめぐらされよ、世間よこしまの上に於おてすら、火事かじ火難かたと云いふものは、人一代ひとひとぢの内うち逢あひものもあり逢あひぬものもあれど、それさへ藏くらを立てゝ用心うしんするあらずや、これにこのたひ此度このたひ死しぬることは、十人じゅうにんは十人じゅうにん百人ひゃくにんは百人ひゃくにん、なみほと達者たつしやうなる生質なまらつき、いかなる息才いきさい堅固けんこなるものても、人一代ひとひとぢ必ず一度いちどは死しぬるとい、生なるゝ時ときより究きうりてあることを、知しつた面おもてして居ゐながら、いまた安心あんしん決定けつていせずんば、まことに氷こほりを踏ふむ如ごとく危あやきことまはの極まはり、皆人みなひとの知顔しりおもてにして知らぬかな、必かなと死しぬる習なひありとはとある、慈鎮じぢん和尚おしょうの御詠歌ごていかの御尤ごゆの至いたり、まづ大方おほほうの人間ひとが何時いつ知しれぬ命いのちとまては知して、居ゐるものなれども、生なれ初はじめしその日ひより一日いちにちく一時ひとときく死して行くこの身みと云いふことを辨わ知ちぬものしや、噓うそへは有明ありあけの行灯あんどうに、油あぶらがとんと無なくなると、そのまゝひつたり灯ひが消きる、その時とき初めて灯あかりの命いのちが尽つたと思おもふは誤あやまり、とぼしつけたる、その時ときより、時々ときとき刻々こくこくお油あぶらの次第しだいお減行へりゆきどころが、その灯あかりの命いのちの深自しんじと縮ちぢまるありさま、これを経へふの念ねん々々壞滅わいめつ

らん俗にお
ひくど云
意なり
○壊滅 破
壊滅亡なり

○怨敵
らみある人
に殺さるゝ
を云
○黄泉 迷
途と同じ

と説き玉ひた、人間とてもその通り、生初しその日より一日暮せば一日限の命が減り、一年たてば一年至の壽命が縮まる、いかいづれも同行中、その有明の行燈も首尾よふ油が尽てから、消ゆるものに究て居れよけれども、無常の娑婆の墓なさは、思はぬ風に吹消され、飛て火入る夏の虫の、その身も焼死、とばしひも消して仕回て、跡は忽ち眞闇がり、今日の我等衆生も、定命かぎりの油が尽て、深自と死てゆくものみ究て居ればよけれども、思はぬ無常の風に消され、急死頓病怨敵、水も溺れ火も焼れ、吹雪に倒れ木から墜ち、毒あたるもある習ひ、何時どうして死なふとも、程の知れぬが我から人の身の上、死て忽ち迷途黄泉の眞闇みに迷たなら、悔んても歎きても跡は返らぬ義て有ふ、何とぞ茲の道理を覺悟し、平生業成の了解慥かに、何時いかなる縁に依て、あへなく命の終るども臨終の夕も狼狽ぬやう、息戈な間も彌陀を頼み達者な内も極樂を願ふて、安心堅固に落着て、今死ましても浄土往生と露塵はとも疑ひぬやう危まぬやう、こゝが何よりの、肝要ことと

や、いさく御座の同行中、しかど如來をたのまれたか、とくと往生に疑ひないか、いまた頼まれず早く頼むがよし、また疑ひ晴遣らそい、よく聞て疑ひを晴るゝやう、兎角凡夫の疑深き習ひなれば、その疑ひの深き凡夫をたのむばかりて助けてやらう、若や自然、頼んだものを助損ふならはわれの永世彌陀にならしと、たしかいさく御誓ひなされしことなれい、あなたのお手元も危いことは微塵もない、一念皈命往生治定と明かに、思取て、假ひ石の浮き木の葉の洗ひ例しありとも、我か往生は仕損すましと、堅固に信してさてこの上は、命を限りたゝ御報謝の南無あみだ佛

勸導薄照卷十六終

勸導薄照卷十七

集義部

(第七) 十劫の弊を奪ふ辨

まつ當流ふ佛をたのみと云ふ就て、近ろはいろくの紛はしき沙汰ありて

中の一何たのむと云ふはなきことと募る邪義もあり、又たのむと云ふも
あるはあれども、身はたけ佛を禮はらし口を助けたまへとたのむと云ふはなきことに
して、こゝろを他力をたのみにまをすことをたのむと云ふはなづけた、ものごとす
ゝひる不正義もあるよし、千万なげかしきことと云ふ、その子細を粗聞は
て見れ、まづ阿彌陀如來因位の時、衆生往生せしむれも正覺取らしと誓
を立て、終にその願成就して、十劫の昔にそで阿彌陀と云ふ正覺をとり玉
へるからは、最早や正覺成就の時、我等が往生も佛体に成就圓滿してあれば、
たゝその所以れをたのもしく思ひよるこふばかり、そこを彌陀たのむこゝろ
をそて、彌陀の名に、助けてあるをたのめ皆人と云ふたものじや、さるを祖
師以來御代々の善知識たのめくと仰せられたは勸化門一往の邊にして、た
ゝこの他力の至極へ引入れん爲の方便じや、他力の至極と云ふは十劫正覺の
刹那より、佛体の方を往生をしたゝめ置かせられた所をきゝひ、きて疑ひな
きか信心となど、云ひくろむるよし、これそて十劫の秘事を類ひして、淨土

○僻見の義見
は推度の義見
直からさる
のからひを
云ひか
○改悔の昔
の悪き心を
改め悔むと
也

○和合の因縁
縁和合せ
るを因縁と
云

門中の邪義じや、もし自然しぜんこの座上にも、左ある僻見を住したる人あらは、
早く改悔のこゝろを起して、その今までの誤りをあらためて、御勸ごきんの正義を
もとつかれよ、そのゆへいかにと云ふ、十劫の以前より、佛の正覺と我等
か往生とを同時を成し玉へる所以れを知りたりといふども、我等か往生すへ
き他力信心の所以れを知らずんは、實報土をいたることは永ながくかなふまじ、
喩へは水といふものは、その水といふものゝ出來初できはじめたる時より、濡ぬると云ふ
徳とくか具そなはり、また火といふものは、その火出來初できはじめたる時より、燒やくと云ふ徳とく
成就してあるといふことを知りたりとも、その水に觸ふねは濡ぬもせと、またそ
の火にさはらねの燒やもせぬ、いかに十劫正覺の昔より、我等か往生の成就し
てある所以れを知りたりといふとも信まざる、機邊きへんか調とねは往生は出來ぬ、
信まざると云ふはそなはら佛をたのむことにて、かの水を觸ふれ火をさはると同
し道理て、佛と衆生と一つに和合をのさるありさまじや、因よてこれを、論をに和
合の因との玉を釋を信佛の因縁と仰せられた、爾は水の中へ手を入れたる

○信佛の因縁
佛名を信するを因縁と云

○專精 心の難らぬを云一心と云か如し

○論註 此文を爰へ引

時初て濡れ、火の中へ足の入りたる時初て焼たと思へども、此方の觸たる手足の力らふては濡れも焼けもせぬ、濡れる焼るの道理は、遠の昔より水や火の方成就してある、我等か機邊に於ては、たのむとき初て往生の出来たるやうふをもへども、たのめはそのまゝたすかるやうの仕掛は、十劫の昔に正覺と同時に、佛体に圓滿成就してあることじや、そこを安心決定鈔、我等の今日今時往生すとも、我心のかしこくて念佛をも申し他力をも信する心の功非ず、勇猛專精も勵み給ひし佛の功德、十劫止覺の刹那於て成し給ひけるか顯れもてゆくなりと仰せられた、この意をまた彌陀たのむ心をすて、彌陀の名に、助けてあるをたのめみなひと、も云ふべきことじや、まこと彌陀たのむ已か心の力らふて助かるにあらず、もとより正覺果名の六字、助け玉ふところをたのみて御恩を喜ぶばかりじや、左あればたのむと云ふは和合の縁で、なくてかなぬことごとと聽聞をせられたがよい、一切の法門みな、因と縁との二つが和合せぬその利益の顯れぬ、故に論註にも、

たるの甚た文に暗しと云へし

○欲生我國以下此一段を終るまでの誤りも亦甚たしと云へし初に言を初には願命に當てたるは最も可なり然るも第十八願へうつし欲の字とし成就の文の願の字は當たるは何事そや全く願生取命の異安心は異

天親菩薩所願生者是因縁義と御釋なされた、願生とはすなはち極樂の生れたいとたのみ願ふことじや、こゝを以て祖師以來御代々の善知識、いつれもたのむくと云ふことを、表わして御勸なされる、このたのむと云ふかそなはち天竺といふ南无唐といふ取命、日本でいふ助け玉へて、これを第十八願へうつせの欲生我國の欲の一字、成就の文では願生彼國の願の一字、願はすなはちねがふと訓せられたは、公義な事を願ふと云ふ、願ひの紙面の願ひの字、今はあみた如來に向ひ奉て、私の後生の一大事御助け候へと願上げ奉ること、かの願ひやうは天竺の言でいへ南无あみた佛、唐の語でいへる取命尽十方無尋光如來とも、日本語でいへるあみた如來我等か今度の一大事の後生助け給へと申すことじや、これをたのむともねがふとも云ふ、爾れは西方の阿彌陀如來、五濁の凡愚を哀れみて、釋迦牟尼佛と示して、天竺へ出て給ひては、南无あみた佛と申せよと教へさせられ、又蓮如上人と成てこの日本を御出なされては、あみた佛後生助け給へと申せよと勸め給ふ、しかるを

なるとなし
たのむとは
歸の字信の
字おして上
りかゝりた
のみ方らふ
そるをたの
むどの給
へるなり是
信順の相た
にして直に
願ふとは
云へからす
運師御文の
御教化廣し
といへども
欲願の文字
をたのむと
仰せられた
ると未だ曾
て見聞を遂
げざる處な
り出離の大
事なれば宜
く心を用ゆ
へきとなり
○此一章全

もし、たのむと云ふのなきこと、たのむには及ぬなど、云ふ、忽ち佛の
御教違し、直に運師の御勸に背けり、永淨土眞宗の御門徒にあらず、釋迦
も運師もすなはち彌陀の應化なれり、釋迦違し運師背くもの、釋直に
あみた如來の御意逆ふ罪人なれば、何とて往生の人数といふ、そもく
何を見付けて、たのむと云ふのなきことぞなんぞ、滅法無法を云ふことぞ、
あら怖ろしや、われ賢しと思ふとも迷ひの凡夫なり、己れ學たりと云ふとも
眞の知識にあらず、たゞ愚癡還て善知識の御指圖に従ひ、心ろを一つにし
て阿彌陀佛を深くたのみ參らせて、更み余の方へ心ろをふらす、一心一向お
佛助け給へと申し上げて、たゞひ罪業は深重なりとも必ず彌陀如來は救ひ在
すへしと信決定して、さてその上命あらん限りは、ねてもさめても南無あ
みた佛くと稱名念佛すへきものなり
(第八) 不願の弊を奪ふ辨
さてその佛をたのむと云ふ就て、身お禮し口お申して助け玉へと云ふこと

く誤れり爰
に一箇の不正
正義と指點
したるもの
こそ眞宗の
正意なれ著
者の辨三業
歸命の異安
心なり

は曾てなきことにて、當流にたのむと云ふは心ろのたのみにとることと云
ひ募る人も世あるよし、これまた一箇の不正義にして、遠くは佛の御教に
に背き、近くは運師の御勸あ差ふ、その子細はいかなれり、まづ觀經の上お
於て、臨終の惡機を勸めらるゝ時、智者復教、合掌叉手、稱南無あみた佛と
説かせられて、下品最劣の惡人、臨終お取詰たる所を、善知識教へて手を合
せて拜んで南無あみた佛と申せよと御意なされた、これ手を合せて拜むと云
ふは身業の所作、念佛申とは口業の所作、去る依て大阿彌陀經あり、阿難す
なはち身業お阿彌陀如來を禮拜して、口業お南無あみた佛と唱へて、歸佛の
ありさまを知らしめ給ひ、莊嚴經あり發一念信歸依瞻禮と説かせられた、
こゝを以て天親菩薩は、世尊我一心歸命尽十方無尋光如來願生安樂國と
信心了解の手本を顯はさせられ、その歸命はすなはち禮拜なりと、曇鸞大師
の御釋なされたは、まづ禮拜して歸命とるか御定りゆへじや、こゝを以て蓮
如上人の、彌陀如來に向ひ奉て、後生助け給へと申せと御意なされた、彌陀

如來ふ向ひ奉る相の禮拜、兎角自力の働さで、未來助かる縁便りのなひと
 知て、阿彌陀如來御助け候らへど、すかり参らす程の心ろになりたるも
 のが、ふと佛を禮拜せまじき道理はなし、故に論註にも、天親菩薩既願生豈
 容レ不レ禮と御釋なされた、また心ふ助け給へと念せるものが、ふの念の口の
 顯れましき所以のなきことじや、故に祖師は御本書に皈命の皈の字と下に
 吉なり述なり宣述人意也とあらはせられた、これもと廣讀み出たる字註み
 して、歸は歸説歸説とつゞく時、もちまへも文字意しや、告るとの告口の告
 の字、述るとは口上に述の述の字で、そなへち我意に思ふことを、向ふの
 佛を告奉つり述上るありさまを云ふ、いかに同行中、とくと思案をして見ら
 れよ、この度未來の一大事の、兎ても角ても自力あての及はぬこと、思詰て
 必至とあなた御力をたのみ、助け給へと念するものか、御佛も向ふて告
 まじき道理なし、また述上て願ふましき所以のなきこと、まつ試に今、心
 ふ助け給へと念して見たかよい、それ心ふ助け給へと念すれば、口は動ねど

も口動くが如く、聲出ねども聲出るか如し、然れば心ろふ念したのかりても
 やり、口上に告奉り述上ると同じ理あかなふことしや、これをなはち念聲
 是一の趣きにして、一心の歸命かそのまゝ口業は出て、御助け候へとなり、
 一心の皈命かやかて身業に現れて兩手を合せひれふとなり、然れは意と云ひ
 口と云ひ身と云ふ、その相は三つお分れたれども、たのむに二つもなく三
 つもない、たのむはたゞ一つじや、喩へは三窓一猿と云ふか如く、猿部屋お
 三つの窓を開置たれ、東の窓へも面を指出し、西の窓へも面を指出し、又
 南の窓へも面を指出せしども、中なる猿はたゞ一正あして、三つの窓へ指出
 したるものみ、な同面なり今もその如く、意ふ念し口お稱へ身お禮する相
 は、三業の三つの窓へおのゝ分れて見ゆれども、その体はたゞ一つの南無
 あみた佛て、二つも三つもあるてない、爾れば身お禮し口お申してたのむ
 と云ふことを、毒の如く嫌ふところの有ふことではない、また天竺の南無あ
 みた佛か日本て阿彌陀佛助け給へと申そころになれば、日本て阿彌陀佛助

け給へと申すのか、直に天竺の南無あみた佛なるゆへに、天竺で南無あみた佛と稱るも、日本で阿彌陀佛後生助け給へとたのむも、全く同事にして毫厘の差もなひ、故に蓮師御直筆の改悔文にも河内出口光善 精舎にありもろくの難行難修自力のこゝろをふりそて、一心に阿彌陀如來我等か今度の一大事の後生御助け候へと、たのみまうしてさふらふ等と記置かせられた、これすなわち今の天親菩薩の願偈の文の意こころとして、紛らはしき秘事法門の邪義を破て、一流眞實の正義を顯し玉はんか爲に御筆を染られたるものなれ、一天四海の同行の安心の龜鑑、これより外あるでない、これを開て見たれば、御一代數通の御文章となる、改悔文の上では、敢て口とも意ともなければ、御文章の上では明かに佛助け玉へと申せとある處か、わづか五帖目廿二通の内にさへ八ヶ處、また助け給へと思ふ歸命の一念はかりにて易く佛けになることある處か二ヶ所、しかれば御文章の上では、口に申すと心に思ふとその御勧め二つに分れたるに似たれども、助け玉への歸命はたゞ一途じや、去に

依て、心お助け玉へと念するところかそのまゝ口に出たる御助け候へこの時その身はどけお向へは、知らぬ覺へず兩手を合せ伏拜ひありさまなり、爾れは三業の所作みなともお、同じ南无あみた佛の信相なれ、する禮拜を止るは恐れ、云ふ口上を制するは誤り、然れども身に禮せぬとて助けられぬと仰せらるゝ彌陀如來にもあらず、口上お申上ねの請取れぬとある他方の本願でもない、身業禮拜の出來ぬものゝ禮拜はせずとも、口業言説のとよなはぬものはの口では申上すとも、心お佛助け玉へと思ひ立つ一念がそのまゝ往生治定の時刻、こゝお疑の晴れて喜ぶが、他方信心の委しや、若しや自然今この御座も、いまだ彌陀をたのまぬ人あらは、後までとは延されぬ出離の大事、その座に居らるゝそのまゝながら、はやく阿彌陀如來に向ひ参らせ、私の後生の一大事御助け候らへと必至と御頼み申されよ、拜上らるゝ阿彌陀如來の、今たのむ機なるか、いや絶付かど待構へて居て、たのむこゝろの起るときそのまゝ御助けの御本願であるはとふ、こゝの所を露塵はとも疑はす危

ますこれより命のあらん限りは稱名念佛を申して、御助けの御恩あら嬉しや有難やと御相續申さるゝが何よりの肝要

(第九) 嫌相の弊を奪ふ辨

○未熟未熟練せざることを愚かなる者を云

當流佛をたのむと云ふ就て、禮拜をしてのせいでの、口上云ての云はいでのとて、諍ふ人のあるは、是はあまり未熟なことを存する、その子細はこのたひ願方の回向を以て廣大難思の信樂を獲得させて、應墮惡道の劣機をこのまゝなから、眞實報土の往生をとげさせふとある阿彌陀如來が、禮拜したらは助けふの、口上いはずは助けられぬと、仰せられふ道理もなし、又た無有出離之縁と機の方を見限りつめて、自力尽て助け玉へとたのむ日に、身に禮し口上かこちなげぎて頼みたりとて、それを惡じと思し召す彌陀如來あてはよもあるまじ、爾れ阿彌陀如來をたのみ思ひ參する心より、身に禮し口上申せ尤もよし、また心たに佛の願力お頼りて一心ろなく、身あ禮せと口上申せともその通り、あへて威儀作法かゝる安心ではな

○肝文肝要の文と云ことあかなめなる文のことあり

○申す口あて申し述ることあは非す

○助け玉へと願ふ相たにして口に述ること非す

い、故にこれを勸め給ふ善知識も、一念歸命の肝文を愚痴な凡夫に知らさふとて、一念に阿彌陀如來今度の我等か一大事の後生助け玉へとたのみ申せとこそ教給、たものなれ、たのむときは佛を拜めよ珠數をとれよとまで仰せられふ筈のないこと、飯を喰せよと云は、口で喰せよとまで教給すとも、鼻で喰せる人もなき筈、狀を書けよといひ、墨すれ筆とれ紙あかけよと、一つく教給すとも、塔の明そうなものや、佛に向ふ時佛に向ふ相あるへし、佛助け給へと申せとあらは、口で申すことは云はすとも知れたこと、助け玉へと思ふ一念とあらは、心ろで思ふこととは、直に合点のゆことじや、佛を拜む手を合せぬものもない筈、また鼻で申せ耳で思へと云ふ道理もないこと、爾れは心ろお助け玉へと思立つ一念がもとて、その一念がそのまゝ助け給へと口へ出來るありさまなれば、云はるゝものは云ふ筈なり、また云ひれずはその通り、さて身ああらはるゝ敬ひも、ならは禮拜するがよし、ならはせぬとて諦もなし、御答はなけれども、なる禮拜をせぬは

誤り、總して萬事お威儀作法はあるものにて、威儀をかゝはる當流の安心ては
 なけれども、すてお善導大師も、稱禮念あみた佛願往生彼國と仰せられ
 たれば、佛に向ひて禮拜すへし、禮拜するおは必ず珠數をも手にとるへし、
 是則ち佛けに向ふ人間の禮儀じや、去年ら珠數をもたずとも、往生淨土のた
 めあつた、他力の信心ひとつばかりなり、それお、さほりあるべからすと御
 意なされたれ、何の造作もなく一心一向に、如來をたのみ參らする他力の
 信心ひとつにて、やすく極樂お往生をることなれども、いかお信心ひとつ
 參る極樂をとして、珠數の一連をも持たずして、佛を手摺にとるやうな
 風情、それ元來他力の安心決定なきゆへじやとて、蓮如上人は御責なさ
 れた、これ何故なれ、心ろあること、口にも出し、又た色にもその
 姿は見ゆるものゆへじや、そこを文明六年二月十六日の御文章も、そもく
 此三四年の間に於て、當山の念佛者の風情を見及ふに、まことおもて他力の
 安心決定せしめたる分なし、そのゆへは珠數の一連をも持つ人なし、さるは

○手づかみ
 敬ふ心な
 きを云

○口に申し
 てたのむと
 云を口に述
 へ願すど云
 こどの最も
 嫌ふへきこ
 となり

どお佛を、手づかみこそせられたり、聖人まつたく珠數をすて、思をおか
 めと仰せられたることなしと御意なされた、これを以てこれを思ふ、當時
 こががしき法義者の中お於ても、身に禮し口お申して佛をたのむと云ふこと
 をかたく嫌ふ人は、それ佛法を、手づかみとると云ふもの、聖人全く、禮拜
 せどお佛をたのめと仰せられたることなし、さりながら往生淨土のためには
 禮拜はせずとも口お申さずとも、助け玉へと思ふころの一念おこるとき
 必と彌陀如來の攝取の光明を放つて、その身の娑婆おあらんとは、この光
 明の中お攝置、在ることじや、これをなから我等か往生の定りたるすがたな
 れは、た、この他力の信心ひとつを取るお依て、極樂おやすく往生すべきこ
 どの、さらお何の疑ひもなし、あら殊勝の彌陀如來の他力の本願やと思ひて
 このありがたさの彌陀の御恩を、いかして報し奉るへきぞなれば、た、
 臥ても起ても間斷なく南無あみた佛く

(第十) 不憑の弊を奪ふ辨

○不正義と指したる者は不正義に非るへし著者反て誤りならん

○たのむ云は信願のこゝろなればたのみふとすして何とや

時ふ一箇の不正義あつて、當流にたのむと仰せらるゝは、たゝたのみにぬることにして、助け玉へどたのむことありあらず、すてに十劫の昔も佛の正覺と同時に、我等か往生を成就して置かせられたる、機法一体の南無のみた佛を、たのみふ思ふて唱へるばかり、それをよそくしく思ひなして、佛けを向ふの的にたてゝ、助け給へどたのむなとゝい、それの他力も疎きことゝと云ふものじやとて、大きに罵る族らもあるよし、これまた大きな誤り、まづ助け給へどたのむと仰せらるゝことは、五帖一部の御文章おなんくとして勝て計られぬはと有て天下の耳目も明かなれい申さふ及はぬこと、さてたのむをたのみふすることゝ云ふ一段、一向道理のなきことでもなければ、紫の朱を奪ふとかや、似たることは似たれども是なることは是ならず、まつたのむと云ふ言を、假名にかき口も云ふときは、たゝ一つのたのむなれども、漢文字にうつして見るとき、たのむとたのみふするとの、二つの意は自ら分るゝ、祖師聖人の御本書等に、憑他力の須憑誓願のと御意なされた

○たのむと云は上來の辨よりみるときは著者の三業者流の餘派ならん

は、みなよりかゝりもたれかゝりて憑みにとることゝ、歸命無量壽如來、歸命無量壽如來、などゝ仰せられたる皈命の二字は、たぞけ給へどたのむことゝ、爾れい彌陀如來は我等を助け玉ふ御佛とときゝわけて、憑信に思ふことゝかあればこそ、御助け候へど歸命たるものなれ、如來を皈命はどのものに、憑信も思はぬものはあるまじきことじや、もし如來をたのみても、口上に申上たるばかりあて、心中も如來をたのみに思はぬ人ならば、それは如來をたのみたる人といふはれぬ、一たびたのみ奉りたれば、もはや往生治定ぞと、たしかに心ろのたのみふ思ひて、御恩を深く貴む人を、まことお如來をたのみたる人といふ、しかれたのみふとせば己か心の内にありて、たのむといふ佛けへ願ふことじや、その佛けへ向てたのむことゝ、初て發るところをい一念發起と云ふ、この心ろの發ると云ふは、もとより佛体も成就し給ひたる南無の御手柄、この時往生一定と疑暗れて落着くところが阿彌陀佛の四字のあらはれなれば、信心とて六字の外になく、この六字の所以れ

を顯はせるか他方の信心、南無はたのむ機の方、阿彌陀佛は助け給ふ法の方
 機も法も圓まふ佛体に成し給へる南無あみた佛、これをたのみて疑ひぬが御當
 流の安心、しかれば機法一体成し玉へる南無あみた佛をよそくしく思ひ
 なしてたのむ道理あらず、阿彌陀如來と云ふ御佛みほとけの、我等こときの地獄な
 らではゆくべきかたのなき惡人を、このまゝながら御助けをさうて、たの
 みて見たればやがて南無あみた佛の六字が己有おんまのなるゆへ、我等は知らず
 覺おぼわねとも凡心と佛心と一つになるとも、こゝを仰せられたものじや、左
 れは一たびたのみ奉たれば凡心佛心一つ成て、南無あみた佛の行体を具足
 し、不可稱不可説不可思議の功德かその身に充み満るゆへ、もはや彌陀心光の
 中に托して、臥ふるも如來の光明の中、起るも如來の光明の中じや依て、近
 しと云ふもまた遠く、たのみあると云ふもまたよそくしき風情じや、爾
 れとも果縛の凡機を離れぬ間は、いつまでも佛けの佛け我れは我れと隔ま歴ま
 のへたてこゝろのつぎぬに依て、已か心のうしろくらさあつけても、たゝ願

力の不思議を仰きて、稱名念佛を申すはかりじや、たのみある彌陀の誓ひを
 たのむへし、たのむ已か心たのむなどはこゝのありさまで、たのんだに依
 て往生は治定とぞ、已かたのんだと云ふところのかりを頼みにして彌陀の誓
 を頼みにせず、参らんでも聞かんでも、唱へいでも喜ばいでも、法義の筋は
 合点して居る、とはく参る和郎達わらうたちより参らぬ已おのれが胸むねが慥たしかな、姦かしまふ唱るも
 のともよりの黙だまて居る此方こゝの覺悟がよいと云容ように心得て、限かぎりなき御恩を得
 ながら御恩かとも思はず暮す分際、まこと彌陀をたのみたる人とは名け
 かたひ、兎角知識の御意にしたがひ、わか身みのいかなる罪業ふかくともそれ
 を佛にまかせ参らせて、たゝ一心ひとこゝろに阿彌陀如來を深くたのみ、一向ひとすに御助
 け候らへと申し、その時往生一定と疑ひなく、さてこの上うへの彌陀如來のわ
 れらをやそく助け在ある御恩の深きことを思ひて、行住坐臥ぎやうじゆうざゐを怠おろそらすたゝ南無
 あみた佛く

(第十一) 三業の弊を奪ふ辨

○此一段看者宜く注意すへきなり

さてかの善導大師の、稱禮念阿彌陀佛願生彼國とある文につきて、身お禮し口お稱し心お念して彌陀をたのめよ、この三業の稱禮念をろへて皈命せねば、淨土往生も叶はぬ容お云ふ人もあるよし、これまた大きな誤りなり祖師以來連如上人等、迄なれの御教化にも三業の歸命をろはねばならぬと仰せられたることを曾てなし、然らば善導の稱禮念してと仰せられたはいかなる趣きぞといへり、平生の機に於て心に念することは勿論、口お唱へ身お禮して願ふへきことじや、しかれども口に稱へ身お禮せねり、ならぬと云ふ往生でないひ、こゝを過不及のなきやうお聽聞いたすへきことじや、近頃も或人の不審お、いまだ彌陀をたのめぬ人有て、手次の寺お來り、私しいまた彌陀を憑奉らす、明日をも斯しがたき命なれば、急き御約束まふしたく存じて参りたり、いざ憑ませて下さりませよと云ふ、その時住持の示しお、たのむとて何もむつかしきことなし、早く佛前にて、出、彌陀如來お向ひ手を合せて、私の後世の一大事助け給へと皈命申されよと教ゆる、この人畏り

○平生の機云意を用ゆへし

候ふとて、手を洗ひ口をすすぎて、佛前に出んと立行とき、庫裡より堂へ赴く内お、そのまゝ廊下に卒倒れ、急死ぬまいものでもない、左あるとき、たのまんどの思立たれども入らざる佛前に出て、佛お向ひてのと云て、勸に際を入れたゆへ、たのまことに命終たれば、よも往生の叶ふまい、もしまたいまだ頼まを命終たれども、たのまんと思立て來りたれば、そのたのまんと思立つ心ろの一念起る所が、一念發起の場所ゆへお、佛前へまで出すして息絶ても、往生は治定ぞと云はり、最早や煩しく歸命には及ぶまし、但しん最初の一念にて往生のぞみたるお、往生のすみたるあとにてたのみまゐると云ふものか、いと意得かたしと云ふ不審あり、これ尤のことじや、いかおも平生の機を臨終の機おひとしふしてとよめ給ふ、一念發起平生業成の宗致、一念佛助け給へと思ひ立つこゝろの發る所を、娑婆の終り臨終ぞと思へ、その時そのまゝ即得往生の人數となるぞとある、常々の御示しなれば、こゝの趣きをさしつめて教化し、安心治定させしむること、佛祖の本意お叶ふべしし

かれども教ゆる人も愚あして辨舌べんげつとなりす、その人の安心治定せるやうあ
 得云ひさかせと、また向ふの人も愚屯あして、得聞分とくもんぶんかぬる風情ならんあは
 さしよせて佛ほとけをたのめその時助け玉ふぞと教ゆる、これ近道ぢんみちとさこねたり、
 去るあ依て蓮如上人も安心信心と云てとら、愚かなるもの何事なにごとぞともふも
 のなり、凡夫がはとけみなること、教へよ、彌陀をたのめとさしよせてす、
 ひべしと御意なされたはこゝのことで有ふ、しかれどももし佛前へ出る道に
 て卒倒すつたうれ、いまだたのますして死したるものはいかにと云ふ時、そこの凡夫
 として量知はかりしりれぬ、最初の一念佛願に願せは、そのまゝ往生治定なるへし、よ
 したのますに死するとも、命あれば必ずたのむ人ゆへあ、佛これをしろめし
 て御助け在すことか、兎角不思議の往生なり、かの法句經あ見へたる、佛
 所あ詣せんとて伴ともなひ出し二人の同行、半途あて殊の外喉のんてのかつきたるゆへあ
 水やあると尋ねし程に、邊ほとりに水はあつたれども、中に蠶うごめく虫あるを見て、一
 人は殺生を恐おそれてこれを飲のみず、終あ渴してそのまゝ死す、一人はよし殺生の

罪を得るとも渴を凌しのぎて命をのべ、佛所あ詣すること本意なしとて、かの蠢うごめく
 虫の居る水を、飲のみて難なく佛所あ至り、上件じやうけんの同行の、空しく半途あ、渴し
 て死たる殘多あまたさを釋尊に申たりしあ、釋尊く給へるは、その者の命はすで
 に終りつれども汝きみより先達さきたちて佛所あ來れり、これ佛制を守るがゆへぞと仰せ
 られたとある、これを以てこれを思ふあたゝ佛法の不可思議なり、喩へる佛
 へ花はなを一枝ひとえぢ捧たもんと思ひ、これを柏水あそよきて、佛前へもちきたり、いまた
 供ともぬ間に、墓なくも死ぬまじきものああらず、死ぬる命の兎も角もあれ、供
 んと思立ちし志しは、佛けは必ず納受し給ふべし、しからは供へぬ内より先
 達て、その志を納受し給ふからは、もはや供るあは及ふまじ、それを煩わづらく
 供るは、納受し給ひたるあどより、供へまはると云ふものかなんぞと思ふが
 ことなるべし、こゝをよくく勘辨して、兎角佛けは三世了達、あどもとさ
 も徹鑑てつかんてごさらせらるゝからは、凡夫の境界として計はるゝことではない、
 持佛の前へ出るにも及はぬ口上にたのむも及はぬとて、一念發起往生治定

のことはりを、云ふて居る間ふその者が死なふやら、そこはさうとも知れぬ
とも死ぬる命は是非及はぬ、何とそ命のあるうちに、善知識の御指圖の通
り、ほどくどたたくまきはたふしき船吉崎の、波の上も彌陀たのむへし、木佛畫像の
前はさらなり、野の末でも山の奥でも、病の床お寐ながらなりとも難風にあ
へる舟の上でも、助け給へどたのみだふすれば、そのまゝ往生治定ぞと、さ
らりと疑ひの雲晴れてその後命ながらへあらは、幾度もく最初の一念をた
のもしく思ひて、己が理屈の計らひを加へぬ容、そなはに御恩の稱名を相續
した、何の中からも南無あみた佛く

(第十二) 膠柱の弊を奪ふ辨

さて動動それは眞宗門人の中お於て、このたび阿彌陀如來を御助け候へどたの
めよと仰せらるゝこと、蓮如上人の御文おは明かなれども、祖師の御言にな
きゆへに、いかゞ致したもののやらんと、ことのはかそれを苦ふして、彼是取
扱人もあるものなるが、これは甚だ歎かしきことしや、それはもと祖師と

○應化衆
生の機お應
して現はれ
給ふを云

○梯鄧は
しむを登る
か如きを云

○助玉へと
云云 助け
玉へと言の
顯はれたる
は法然上人
にあり蓮師
に始まりた
ることには

蓮師とを別物のやうに思ひ、祖師も蓮師も同じ彌陀の應化と云ふことを信せ
と、蓮師を凡人のやうお意得たるより、蓮師お在ても祖師おなければなと、
もてあつかふと云ふものしや、そもく佛をたのむと云ふことは、もと彌陀
の願意に在て列祖みなこの外はなけども、根より樹に至り樹より枝を生し、
枝より雷出て、終お開て花となる如く師資相承次第梯鄧して、この所まで
至届かせ玉ひたものじや、故お御一代記等おも、一つ親鸞聖人の御流れはた
のむ一念の所肝要なり、故にたのむと云ふことをは代々あそはし置かれ候へ
ども、委く何とたのめと云ふことをは知らざりき、蓮如上人御文に、雜行を
すて、後生助け玉へと一心に彌陀をたのめと、明かお知らせられ候、まこと
お御再興の聖人にて在ましまるものなりとあれば、助け給へと彌陀をたのめと仰せ
らるゝことの、明かに顯れたるは蓮如上人の御代しや、しからは祖師の思召
にもなきことを、蓮如上人たくみ出して御勧めなされたかといへ、なかく
祖師所てはそとない、これはもと阿彌陀如來の直の御指圖じや、去お依て蓮如上

す通師を非
御再興の上
人と申そこ
とを誤ある
へからす

人御門弟示して、彌陀をたのめと云ふことを、初て教られたる御方は阿彌陀如來と仰せられ、御文章の中も、阿彌陀如來の仰せられけるやうは末代の凡夫罪業の我等たらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生を、必ず救ふへしと仰せられたりと着し置かせられ、祖師聖人より御相承の至極はた、彌陀をたのむ一念の義より外に別義なし、いかなる御誓ひもあるへし、もしたのむ一念おて凡夫往生せぬことあらは、何たる御誓言をも仰せられふとの玉ひたること、御一代記等詳かなれり、一朝一夕な容易のことていなひ、第十八願で欲生我國の御ん約束、般舟三昧經で跋陀和菩薩に對して當念我名、守護國界經での奄字觀、阿彌陀如來の御直の仰せお依て、現在の釋迦如來さへ、彌陀をたのんで正覺を成就なされたわけは明かに經文お見へてあることそれより龍樹菩薩の稱名自皈と教なさせられたも天親菩薩の一心歸命と示し玉ひたも、みな彌陀をたのむこと、その外曇鸞大師の信佛の因縁、道綽禪師の勸信求往、善導和尚の乘彼願力、源信僧都の

○舷を刻み
云々一方
を知らざる
を云

唯稱彌陀、法然上人の念佛爲本、みな同轍なれども、直に彌陀をたのむと云ふ言かないに依てと云ふなれば、それは舷を刻み株を守るの類ひまして教ゆへき手掛りもなき愚人と云ふものしや、されり吉野の櫻を見んと分入て打詠め、爛熳とささつゝきたる花盛を、さても見事と余念なく詠入り、感お堪たるありさまならん、それこそ花を見る人と云ふもの、この花は何から咲た蕾から、その蕾は何から出た枝から、その枝は何からぞと、五百問事の益なきごとく、もとのく〜と問ひ尋ねて目を暮と和郎なれば、花見る人とは名け難い、かくまて比類なく御勸下さる蓮如上人の御文の御意を、さても有難やと子細なく信して、疑ひを喜ぶ人こそ、よく本願の花見る人と云ふものなれ、それを直に信受せず、この花のものは蕾、その蕾のものはなんぞと、根を掘て穿鑿したがり、それお日を暮す風情ならん、千萬殘多きことしや、何の道も蓮如上人の御文の御言を彼是と取直す人なれり、眞宗の御門徒といはれぬ、しかるをぬて眞宗の御門徒の中、佛助け給へと口上にたのむ

いなきこと、口に顯してたのまの南無あみた佛と云てたのむへし、南無あみた佛と云ふのあみたはとけわれを助け給へと云ふことなるゆへに、南無あみた佛と稱れり、あみたはとけ我を助け給へとたのむことなるなり、その外に佛助け給へと口上ふたのむと云ふの、祖師以來かつてなきこととせむる人もあるよし、是等のかの祖師の御言に、佛助け給へと仰置かれたる文証のなきにこまりて、幸い南無あみた佛とたのませ給ひてもあり、蓮如上人も南無あみた佛とたのめみなひと、仰せられたる御味歌あれば、これこそまことと同轍なれと思ひしより、この勸めを一決して佛助け給へと口上ふたのむと云ふはなきこととぞと打出したるものならん、げに上レ枝伐レ幹とやさてく悲しき今案なり、かはとまで蓮帥敷通の御文お佛助け給へと申さん衆生をいど仰せ置かれし明白なる御勸化を、云ひ紛らかさんとは勿体なきことしや、口お佛助け玉へと申してたのむも、口お南無あみた佛と申してたのむも心ろお佛助け給へと念するも、心ろに南無あみた佛と念するも、又た南無と

○蓮師の助け給へたのむとあるの口上たのみと云こと眞宗に於

たのむも、みな同じ道理にて、毫厘の差ひもなきことしや、去るお依て御文章に、たのむ心ろ一つふても、佛助け玉へと申さん衆生をとも、又た南無とたのむ衆生をとも、或は南無あみた佛と歸命それはとも御勸めなされたものしや、しかれば南無とはかりたのみてさへ、そのまゝ阿彌陀佛の御助けとあるものを、況や南無あみた佛とたのむもの、淨土へ参るまじきやうのなきこと、又た心ろに助け玉へと思ふたはかりでとら助け給ふ御佛なるものを況や口に南無あみた佛と稱へて心に助け給へと念するもの、往生せまじきやうなし、又た口ら南無あみた佛と稱へて心に助け給へと思ひてさへ往生するものが、心お助け玉へと思ひて口に助け給へと申し、またその上お御助け一定あら嬉しや南無あみた佛と稱へ喜びて、疑ひなく相續するもの、往生せまじき道理のないこと、もし助け玉へと口で申すことが祖師の思召おも叶ぬこととて、眞宗安心の違害おもなることならん、何しに蓮如上人敷通の御文お、一心一向お佛助け玉へと申さん衆生をと紛らはしく仰せらるへきぞ、

て最も思ひ
へきことな
り

それよりは近道に、一心一向に南無あみた佛と申さん衆生を、一口で埒の
明やうに御書なさるゝことじや、忝くも蓮如上人愚鈍の劣機を引かんか爲に
梵語の南無あみた佛を、和語てみな知やうに、阿彌陀如來助け給へどた
のみ申せ、その一念ふて往生治定と疑ひなく、たゞこの上の御恩報謝の爲と
思ひて南無あみた佛と申せ、必ず一遍の念佛をあみたはとけふれを
助け給へゝのこゝろで申せてないはとにと、明々了々とあきらかあ、よ
く愚なるものゝ合点しやすきやう、ふの疑の晴やとまやうに御勸なされたも
のなれり、一も二もないことを貴く思ひ、たのみて往生一定と疑ひなく、そ
の心に念とるも口お申すも身お敬ふにても、佛法のみちのみなく、世方の御
回向より顯はるゝことなれり、この所を有難ふ忝ふ存して、たゞ操返し
南無あみた佛と

勸導簿照卷十七終

勸導簿照卷十八

集文部

其一

(第十三) 龍樹菩薩の十住毘婆娑論易行品二

阿彌陀佛本願如_レ是若人念_レ我稱名目歸即入_ニ必定_一得_ニ阿耨多羅三藐三菩提_一是
故常應_ニ憶念_一と着_レし置かせられたこの御文の阿彌陀如來の第十八願の意を
得て易行の至極を御勸めなされたる論文にして○まづ阿彌陀佛の本願とは開
ていへは十七十八の二願、合していへは第十八願のこと○如_レ是とはこの通
りと云ふこと、是即ちかの善導の御釋あ、如_レ是定辭機行必益と仰せら
れし如く、ものやこれお相違なきこと、決定して仰せらるゝ御詞あて、火の
物を焼き水の物を濡すも、違のなきお同く、たのめり必ず助け給ふに相違の
なき御本願ぞと、判斷らせられて、阿彌陀佛の本願如_レ是と御意なされたも
のなり○さて若人とあるは、第十八願の十方衆生、成就の文の者有衆生、十方衆
生諸有

○十住華嚴經十地品
なり地の住
の義
○毘婆娑
梵語にして
譯して廣説
と云
○機法を
聞く衆生の
こと

○吞却の
○焼爛や
○碎刺磨濤
きりさきう
ちくたくを
云

衆生のこと愚が勸詞小箋上の八丁よそれを今ひきよせて、人といふ一字を以て御知ら
り三まてにくはれこ、に入るへし
せなされたもので、衆生といふとき、下は地獄より餓鬼も畜生も修羅も人
間も天人も聲聞も縁覺も上は菩薩までも九界の因人みなながら衆生なれども
その中で、燃立つ地獄の猛火おむせび、熱鉄丸を吞却し、沸銅湯お焼爛せ
れ、斫刺磨濤の苦みを受けて居る、地獄の衆生お云て聞かせて埒の明くことで
もなし、また、尾を振り頭を垂れ門にイみ背戸に躊躇りて米泔のこめのあら
ひしるを嗽り、餘糞のおくのみを食て飢を凌ぐ、犬を相手お告教て
合点する彌陀の本誓にもあらず、納戸の隅をこそつく鼠に聞耳たて、膳棚の
端お納たる灸の臭に鼻を潜て嗅歩き、爐の灰お尿を落し椀の中お面指入る
ゝやうな、猫お對して説述て有難がる第十八願にもあられは、廣く十方衆生
を漏し玉のぬ大悲なれども、その中おて本とし玉ふもの人間ゆへに、若人
と打出し玉ひたものなりこれを

「法然上人は、十方衆生の句に、廣く有智无智有罪无罪、善人悪人、持戒賢愚

○末法万年
佛滅後五
百年の間を
正法と云ひ
次の十年を
像法と云ひ
次の万年を
末法と云其
後を滅法の
世と稱と聖
道の教は
此ときみな
滅す彌陀の
本願は法滅
の世百歳の
間止まると
云へり

男女、若し佛の在世の衆生若し佛の滅後の此頃の衆生若し釋迦の末法万年の
後、三寶みな失せての終の衆生までも皆籠るなり和語證四十一丁と仰せられ
「祖師聖人は、諸有衆生といふの十方のよろつての衆生とまふすところなり法要
二丁一念
多念証文と示し玉ひ
蓮如上人は、末代无智の在家止住の男女たらん輩と御意なされた、これの人
の中ても、本願の正機と目掛け玉ふ所を知らんで御釋なされたものおして、
彌陀大悲の御心に在ては、上代よりの末代、有智よりは无智、出家よりの在
家止住の男女の類を、本と思召とゆへなり、依て祖師愚禿七種の惡機五種
の惡性と云ふことを立て、本願の正機を知らしめ玉ひ、聲聞縁覺菩薩等は、
淨土の傍機なりとあれは附たり、五逆十惡具諸不善應墮惡道の劣機を、第十
八願の正機と目掛けひたものおて、正機と云ふはをも、傍機といふはわきすな
はち正機の正は正客の正の字おて、喩へは世間て振舞をするお正客と相伴と
のある如しこの喩はしく此書第十一卷
集喻部にありこ、に入るべしさて念し我とい、こゝか龍樹菩薩が阿彌陀如

來になり代て仰せらるゝ御詞ふして、すなはち、我とは設得佛の我の字、阿彌陀如來の御自身を指て仰せらるゝ御詞念の乃至一念の念の字、一向專念の念の字、念佛往生の念の字、たゞ一念でも、我を一筋念じたる程のものと給へるこゝろにして、念するとはそなはち信すること、

「祖師聖人の御言ふ、念といふはふかく信するなり法要一の四十二丁尊號銘文

「又念の如來の御誓ひを一心なく信するを云ふなり法要二の廿六丁一念多念誦文」など、も御意なされたれば、念我と云ふ、さしよせていへ、彌陀如來の御方よりわれを

○休息おこたること云

信して疑はぬこゝろならばと仰せらるることなり、これとなはち般舟三昧經の中彌陀如來自説て、欲來生我國者、常念我名、莫令休息と仰せられた趣き、法照禪師の五會法事讀などに、彼佛因中立弘誓、開名念我總迎來と着された意、みな同じ道理ふして、もと阿彌陀如來の因位の時より、思ひ立ち玉ひた弘誓のありさまが、わが極樂を生れたいと思ふもの、まづ南無あみた佛の所以を聞て、この名号を念せよ、かならず迎と接るはとに

あること也、しかれの般舟經には念我名と説てあり、今の易行品ふの念我稱名と仰せられ、それを法照禪師は開名念我釋せらるゝ、言にいふか差あれども、みな南無あみた佛を信じ稱ることなり、依て

「祖師の御釋に聞といふの如來のちかひのみなを信すとまふすなりと法要一の三十二丁尊號銘文仰せられ

「又聞のさくといふ信心をあらはそみのりなりと法要二の四十一丁唯信抄文意」も御意なされた

○さて稱名との南無あみた佛とまふそこと、○自皈との自の自然の義にして、他方よりおのすからしからしむるを云ふ、皈は皈命の義にして、直おさしつて如來を助け玉へどたのみ奉ることなり、たのむことは此書の十七卷にいはし見合せて辨すべしこれとなはち自力の働さみあらず、他方よりおのづからたのましめ下さるゆへに自皈と云ふ、尤般舟三昧經の中卷に説てある、自歸の自の字を、蓮如上人のみづからと和訓して置かせられた趣から準例して見るときは、手自ら佛をたのむことを、自歸と云ふふ似たれども、たどひ自歸むども、それ全く自力の發

○和訓和語を以ておしゆることなり

起に非ず、他方自然の催しによることなれば、自は全く自然の義なり、すな
わちこゝを

「祖師の御言に、自然といふのもどよりしからしむといふことばなり、彌陀佛
の御誓ひのものとより行者の計ひに非ずして、南無阿彌陀佛とたのませ玉ひて、
迎んと計はせ給たるによりて、行者のよからんともあしからんとも思ひぬを、
自然との申そとさゝてさふらふ正保末奥書と仰せられた、すれは南無あみた佛と
稱して、さて助け給へとたのむことを稱名自師との仰せられたもて、一向念
佛申さす佛たのむものは世に絶てなきことなり、しかるひやゝもそれは、
口に南無あみた佛と稱へて御助け候へとたのむは、自餘の淨土宗在て、當流
の安心あは、かつてなきことの容ふ意得たる人もあるものなり、これも誤り
なり、その口に南無あみた佛を稱るおつきて、その心る自力か他力かと云ふ
穿作せんさくもあることなり、一向南無あみた佛も稱へぬものも、自力他力の吟味と
ころのなきはづなり、噺へは百姓の瓜うりを作るふ、最初あたま化花とて、實のならぬ

○一向念佛
申さす云云
口お唱ふ
る念佛は報
謝と心得る
ならぬ自出
度心中と云
ふへし自の
唱る功を以
て往生の業
因と計らひ
募らひ自餘
の淨土宗と
同じ意にし

○たどひ一
聲云々 若
者の意如何
是等の辨甚
た紛れるこ
とあり

○一段の語
勢讀者注意
そへし

花の咲くことがあるものなり、左とれの若これの化花にてはなきか、瓜のなる
花なればよきかなと云ふは、花のさきたる上にあることなり、一向花もさかぬ
ふ化花か化花ふ非とかなと云ふ所以はなきことなり、今も南無阿彌陀佛の稱
名の花のさくにつけて、若や自力の化花にてはなきなきか、報土往生の實の
なる花なればよきかなと云ふ吟味もあることなり、一向南無阿彌陀佛も唱
へぬものも自力他力の詮作所のなきことなり、只今の論文に念我唱名自皈と
あるは他力お歸する南無阿彌陀佛ゆへに、中々化花の唱名には非ず、たどひ
一聲にもせよ十聲にもせよ、残らと報土往生の實のなる念佛なり、こゝを以
てまづ南無阿彌陀佛と唱ることは、淨土眞實の太行おして一生相續の肝要な
り、故お

「祖師聖人も、ひとへみみなを唱る人のみ、みな極樂淨土に往生するなりとも
法要二の三十四
下唯信鈔文意 仰せられた、しかれば唱名は信前信後ともお在て、南無阿彌陀佛
助け給へとたのむものも、助け給へ南無阿彌陀佛と唱るものも、その心る他

○助け玉へ
とは勅命お
信願せる相
なるを忘る
へからす

力お取して、兎ても角ても、私がたのむ力稱ふる功て佛けになることの叶はぬこの身なれども、たのむはと召成され唱ふるまでお仕立て給ひた、佛力願力の御不思議ゆへお、往生は治定ぞと、疑ひなく信する機なれ、往生お間違ひのさらくなひ、しかれども一生の間た、又してもく助け給へ南无阿彌陀佛助け給へ南无阿彌陀佛と念し唱へる安心は、他方の家おはなきことなり最初一念助け給へと思立つころの起る時、そのまゝ、必定のかずお入りたる身の上なれば、その上お助け玉へくと、たのみ稱へる道理はなきことなり、故に一念助け玉へと信する時往生治定と落居して、その上命ながらへあらぬ御助けの御恩ありがたやと思ひて、たゞ南无阿彌陀佛くこの御恩報謝がとまはら、疑ひなく信じたる証據なり、こゝが般舟經の常念我名莫令休息の場所今の論文に是故常應憶念との給ひたるころなり

其二

(第二) 念我唱名自歸とあるは上お申す如く、一念あみた如來お念をかけて

南无あみた佛たそけ給へとたのむころじや、すれぬ唱名との南无あみた佛と申すこと、自歸のたそけ給へとたのむ信心、まづ阿彌陀如來の御本願の趣きで、第十七願お唱名を誓、第十八願に信心を誓ひ給ひて、我等か淨土參りの行のといへは唱名より外はなひ、依て

「祖師聖人の大行者唱南无尋光如來の名と仰せられ

「又往生の要には如來のみなら稱るおすきたることなしとも法要一の四十二丁尊號經文御意な

れた、しかれの二願並べて見る時は、十七願の稱名、十八願は信心おして、他方の大行といへは十七の願功、他方の大信といへは十八の願功なれども、二願もと相離れざるがゆへに、十七の大行にそなへら十八の大信を具し、十八の大信お則ち十七の大行を具と、なれども十七願は信を具したる大行、十八行の行を具したる大信ゆへお、祖師の第十七願を眞實行の願とも唱名の悲願とも、又た第十八願を眞實信の願とも信樂の悲願とも名け給ひたものじや、しかれば稱名の十七願ころおして自歸は十八願のころとも云ふべきもの

○大行の法
の所行の法
信は能信と
云か六要の
の判釋なり

○稱名をな
はち信心
穩かならさ
る話より
○諸佛稱名
の願とは此
唱名は念佛
ことあり非
揚讃嘆する
義なり
○能行能信
の用を兼ね
るとは穩な
らざるなり
○必定 必
す佛なる
に定ること
おして正定
聚と同じし

なれども、最初念我もある所が、信の一念おして、その信の一念より自ら口へ浮へる南无あみた佛なれば、この稱名は直ち他方信心の所作おして第十八願中の物じや、左あれば第十八願を往相信心の願と仰せられたればとて稱名なきふはあらず、第十八願の中に在ては、稱名すなはち信心なり、又第十七願を諸佛稱名の願と仰せられたればとて信心を具せざるには非ぞ、第十七願の中ふ在ては信心をなはち稱名なり、しかれば今の念我唱名自皈とあるもの十七七八二願の意と見ても、曾て違害はなけれとも、十七の唱名は所信所行の体にして能行能信の用を兼ねるゆへに、今の稱名自皈はさしつめて第十八の意と見れぬ所のない一念あみた如來に念をかけて、南无あみた佛とたのみ奉れば、その時そのまゝ正定不退のかずに入れしめ下さるゝぞと云ふことを只今の御言には、念我唱名自皈即入ニ必定、と御論判なされたものじや、このありさまを

「祖師はこの眞實の唱名眞實の信樂をぬたる人のすなはち正定聚の位に住せ

○二種 往
相還相の廻
向なり

○口に稱へ
たばかり云
云 著者の
語語亦是し

○阿耨多羅
三藐三菩提

しめんと誓ひ玉へりと仰せられた法要一の十八 丁往生文類 しからは唱名と信心と二つを得たる人でなければ、正定聚入ることは吐はぬかといへば、何しに左云ふことで有ふ、一念の信おこるとき、そのまゝ息切れ眼閉て、一聲の唱名お及はすとも、その一念の信心が如來二種の回向より顯るゝゆへに、やかに正定聚に住し、必ず滅度おいたるなり、こゝを他方といふ、依て

「祖師聖人も如來の二種の回向に依て、眞實の信樂を得たる人は、必ず正定聚の位お住とるがゆへに、他方とは申さなりと御意なされた法要一の廿 丁往生文類

しかれの他方の信心に必ず稱名が含であり又た他方の稱名に必ず信心か含てあるお依て、苦逼つて念を失ふて居るものは口お唱へたばかりでも往生、また命ら刹那お縮つて稱ふるいとまのなきものは、心ろお信したのかりても往生お違はない、因てその命あるもの口にも南無阿彌陀佛と唱へ、心るお助け玉へと念し、身も禮拜とへきことなり、故お龍樹大士も偈を作て、我今身口意お合掌稽首禮との給へり○さて即入ニ必定、得ニ阿耨多羅三藐三菩

とは梵語
正遍道と譯
して佛果の
名なり

提とは、即ちと云ふはそこでそのまゝと云意、手間も隙も入らぬことを云ふ

「祖師の御釋にも、即ちとなつちといふ時をへだてず日をへだてず、正定聚の位にさだまるをいふと法要二の廿六丁一念多念文意御意なされた、つぎも必定とはかならずさたまると云ふ文字にて、これとなつち正定聚不退轉なんといふ菩薩の位ひおして、必ず阿耨多羅三藐三菩提の、佛果に至るに定まると云ふこゝろゆへ、必定とも又正定ともいふ、こゝを

○阿毗跋致、
阿惟越致、
とも不退
轉なり

「祖師の御言も、正定聚の位お定まると不退轉お住すといの玉へるなり、この位に定まりぬれ、必ず无上涅槃お至るべき身となるがゆへ、等正覺をなるともとき、阿毘跋致お至るとも、阿惟越致お至るともとき給ふ、即時入必定とも申となりと法要二の四丁一念多念文意仰せられた、これとなつち此土の益なり、阿耨多羅三藐三菩提と云ふ、梵語おして漢語お譯せ、阿を無と名け、耨多羅を上と名け、三藐と正と名け、三を遍と名け、菩提を道と名るお依て、天竺

○佛力住持
願力他力
の常お守り
玉ふを云

の阿耨多羅三藐三菩提の、漢ては無上正遍道と云ふ、これとなつち佛のことで、無上のうへなし、正遍道はまつとくなる智恵を以て、一切の法を知しめとゆへ、御身も御心も徧く法界お満て障なき御道ゆへに、そこを无上正遍道と云ふ、それは阿耨多羅三藐三菩提を得るとい、ちかみちにいへは佛けおなるぞと云ふこと、これの彼土の益なり、されば彌陀の本願を信じ南無おみだ佛を唱へて、極樂に生れんと願ふものは、此世からのや正定不退の菩薩の中間入りをとげ、何時命終るとも、阿耨多羅三藐三菩提の佛けになるに、違はさらくなひとある、明かなる龍樹大士の御論判の趣○是故常應二憶念一と御勸なされた、常とはこれお相續常、不斷常の二つか有て、ものゝ斷ぬことをも常と云ひ、又た續ことをも常と云ふ、喩へは河の水か常お流るといひ、不斷常おしてきさまのなき貌、また軒の滴か常に落るといひ、相續常おして相續ありさまなり、今も他力回向佛力住持の信心の体は不斷常おして、一たび得てからの彌陀の心光に攝取せられ、されまなき御照お逢て居る

ゆへ信心不斷にして往生を遂ることなり。また佛恩を思ひ念佛を唱る、憶念の相にわたつて云ふ時は、相續常ふして、時々思ひ出して相續する分也、しかれどもその時々、本願の尊さを思出るところが、もと他方回向の信体の不斷にして、たねつねなるゆへなり、そこを憶念と云ふ

「祖師の御釋ふ、憶念といふは、信心まことなる人の、本願を常ふ思ひ出るころの、たねつねなるなり」と法要二の四十一 丁唯信文意仰せられた、喩への時計といふものが、朝六つ半を打てより、五つまでには半時のされまがあり、五つ半までには、

○六つ半
今の七時な
り
○五つ半
今の九時な
り
○世尊 世
間の事情な
り

又半時のたねまがあれど、中の機關ふされまがあるかといへば、仕掛てから終り迄、中の機關ふたねまと云ふはなひ、それ故人は世事ふまされて時を忘れて居ることもあれど、時計の時を忘るゝと言ふことはなひ、時々ちん／＼と時を打て知らせる、今もその如く朝念佛を唱へてから晝稱へ、又それより後稱へ喜ぶまでには、一時半時つゞされまが有ふとまゝよ、胸の信心にされまど云ふの曾てなひ、その信体ふされまがなき故に我等の煩惱の世事にまぎれて、

往生の時剋を打忘れて居ることもあるれど、時々思ひ掛けなく南无あみだ佛／＼と、念佛の時を打て、往生の時剋の近づくことを知しめて下さるゝと云ふの、偏ふ他方の信相あて在すこの下は此書の第十六卷一 念の弊を奪ふ辨を入るべし

其三

天親文

○无量壽經
云々 淨土論
と唱す
○世尊 智
斷恩の三往
を具して世
間の爲に尊
重せらるゝ
故なり

天親菩薩の御造りなされた、无量壽經優婆提舍願生の偈文に、世尊我一心歸命尽十方无尊光如来願生安樂國とあらせられた、この文の意は、具さに曇鸞大師の論註ふ、示置かせられたはどお、今且くその大意を和げて聽聞に及ばし、まづ初に○世尊あどるの世尊と云ふ文字こゝろで、三世十方の諸佛をすべて世尊と名け奉れども、今は現在の教主釋迦如來を指て世尊と仰せられたものなり、故ふ

祖師の御言ふ、世尊の釋迦如來なりと仰せられた法要一の三十七 丁摩訶鉢特伽文○さて一心どあ

るの天親菩薩自誓之詞と有て天親菩薩我どわが心をせがみ立て、一筋に阿

○雜縁諸
の世間の因
縁なり

○經營い
となみと云

彌陀陀來の本願を、さしひけ玉ふほどの氣味相で、自誓と云ふは、自は自身のこと、誓は家督の誓の字、となはち爾雅の疏に御正なりと註して、もと馬を御すことろの文字で、かの傍經を行かんとする馬の、手繩をとりなをして、正路のそぐみちる牽向るはどのことろ、世間で家の主と成て、その家を相續すべきものを、家督相續なと云ふも、亭主といふもの、その家内の者を、御正しせがみつかふものゆへに家督といふ、今この一心も、雜行雜修余佛余菩薩の岐路へ向ふ心ろを引返して、一筋にあみたほどけお御助け候へど、さし向ふありさま、わが三業の馬を御正しせがみたて、雜縁の爲に亂動せられぬ容に心々相續の場へ、引向け給ふことろを一心と云ふ、尤この一心が最初の一念發起より、後時相續の作業へまで、行渡ることろなれども、その後時相續へ行渡りて、一生の間た佛恩報謝の經營をなし、身に禮し口お稱へ意お念して、他のことを雜へず、大命百年を尽すとも、そのもとは最初發起の一心より、心々相續せる所作なれば、この一心が他方回向の眞實信なり、故ふ

「祖師の信の巻に、本願とてお三信を誓ひ玉へり、何故お論主一心と玉ふやと問をあげて、されり愚鈍の衆生の解了しやすからしめし爲に、三を合して一とし玉ふかと御答なされた、しかれの第十八願ての至心信樂欲生の三信とあれども、それを引寄て見ればたゞ行者皈命の一心也

「祖師の御釋に信心無二一心故曰一心と御意なされたれり、彌陀陀來を二心なく頼て、疑ひぬを一心と云、これを直おまこと信心とも云ふ也、因て「祖師の御言ふ一心と云ふは、教主世尊のみことを、二心なく疑ひなしとなり、すなはちこれまこと信心なりと法要一の三十御意なされた○さて皈命命尽十方無尋光如來」とい

「祖師の御釋に尽十方無尋光如來と申すは、すなはち阿彌陀陀來なり、この如來は光明なり、尽十方といふは尽はつくそといふことくといふ、十方世界をつくしてことくくみち玉へるなり、无尋といふはさはることなしとなり、煩惱惡業おさへられざるあり、光如來とまふすは阿彌陀佛なり、この如

○利土 國
土と云に同
し

來はすなりち不可思議光佛とまふと、この如來は智慧の相なり、十方微塵刹
土にみち給へりとしるへしと（要一の三十
七丁釋號銘文）の給ひたれば、阿彌陀如來の光明は
普く十方微塵刹土を御照しなさるゝふ、何にても導るものなきことを、尽十方
無尋光と申す、花には風が導となり月あり雲が導りとなる、月日の光りい、
一須彌世界と照せども、雲さき雨雪など、いろくくの導あつて、山の陰谷の
底まで照徹ことい叶いぬゆへ、日裏日表の差別もあるが、今阿彌陀如來の光明
は、十方を徹尽て御てらしなさるゝに、山も林も云に及いそ、いかなる諸邪業
繁にても碍ふなるものと云かない、そこを无尋と云、この无碍の光明も照され
參らするゆへに、无始已來の无明業障の、積りくし雪も氷もどけりて、
信心歡喜の水となる、しからは一つ不審がある、さほど導のなき光明で、煩惱
惡業にも遮られすい、今日の我等も、その光照を蒙て拜む日もありさうなも
のなるふ、煩惱も眼さへられて、攝取の光明を見ぬとあるは、光明ふこれ
礙る所があると云ふものでいなきかと云ふ時、そこは曇鸞和尚の論註ふ、譬

○邪業繁
惡業を云ふ

○四天下
須彌四洲を
云
○蜜雲 雨
のこと

○昏暗
くらきを云

如日光 周ニ四天下ニ而盲者不見非 月光不上周也、亦如蜜雲 洪 霖 而頑石
不潤 非雨不洽と仰せられた通り、日輪は周く四天下をてらせども盲者
は見す春雨の蜜雲と降りとも、頑石へは潤はぬ、潤はぬの石の所爲、見
ぬの盲者の咎なり、今もその如く、如來の光明は十方法界をつきぬきて御てら
しなされるれども、それを蒙見ざるの、おのれくが機の咎なり、しかれば
礙の衆生の方に在て、光明の方にはなひ、盲は見ぬとも日の光はてらすか如
く、我等の知らず覺へされども、大悲の方に倦ことなく、常御てらし下
さるゝゆへ、終には無明昏暗のやみりれて、往生治定の信を了解し、攝取不捨
の大益を蒙り奉ることなり、しかれば此世の日輪か、いかん四天下をてらし給
へいども、畢竟有尋光明ゆへに、何程なかふてらされても、盲者の眼をは
明らかになさるゝことは叶いぬ、今阿彌陀如來の無尋法身の光明は、世の盲冥
を照して、无明の盲をてらしぬきて、終ふは三明无尋の明者して下さるゝが、
他方の不思議に限究る（此下へ此書の第十一卷集喻部に
出たる日光消氷の喩を入るへし）

其四

(第四) しかれの尽十方无碍光とは、阿彌陀如來の光明へ、普く十方世界の隅から隅まで、碍なくしてらし玉ひこの光明を以て、諸有る衆生を濟度なさるゝ御佛ゆへ、そこで彼方の御名を、尽十方無碍光如來と申し奉ることなり、あみたと云ふは天竺の語、漢の語に翻譯とよ、その徳に依ていろくみ分れ、或は無量壽佛とも無量光佛とも、又は無邊光佛とも無碍光佛とも、無對光佛とも炎王光佛とも、清淨光佛とも、歡喜光佛とも智慧光佛とも不斷光佛とも、難思光佛とも無稱光佛とも、超日月光佛とも、さては不可思議光佛とも申す、もと阿彌陀の三字には、無量の徳を圓滿具足し玉へとも、まつその中か光明壽明の二つの大悲の根本、かの和讃に超世无上に攝取し、選擇五劫思惟して、光明壽命の誓願を、大悲の本とし玉へりともあるは其事なり、爾る處か光明壽命の二つの中か、衆生利益の妙用を施し玉ふときは、まづ光明がさきなり、故に經の中かも十に九つまで、光徳に依て御名を設け玉ひたものなり、その

○或は曰下
初の一を除
て外を十二
光と稱す大
經の説なり

○壽明 明
は命の字な
り

○妙用 不
思議なるは
たらきを云

光徳さましくある中に阿彌陀を阿彌陀と名け奉るは、この光明のあるゆへなり、そこを阿彌陀經か、彼佛何故号阿彌陀、彼佛光明无量照十方国无所障碍、是故号为阿彌陀と御演説なされた、すれば尽十方无碍のありさまが、一切の勝益あわたるゆへに、今その名義を知らしめて、尽十方无碍光如來と打出し玉ひたもので、尽十方とはさなりち經か、光明遍照十方世界の十方、和讃か

○みそなは
し 觀の字
あして上よ
り下をみる
ことを云

「十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし攝取して捨され阿彌陀と名けたてまつると仰せられた趣きしかれば、光明あまねく十世界を照らさせ給ふはかりていなひ、念佛の衆生を攝取て棄給ひぬゆへ阿彌陀と名け奉るとある、善導大師の觀念法門に攝取不捨故名阿彌陀とあるもこの所以なり、なにさす諸佛もかのく光明を放ち給へど、この攝取不捨の大益を施し玉ふは、彌陀一佛に限る、故に蓮如上人は、光明と攝取とを二つお押開きて、文明六年七月十四日の御文に、しかるに彌陀如來はすてに、攝取と光明といふ二つ

の理を以て、衆生を濟度し給ふなり、まづこの光明は宿善の機ありて照されぬれば、つもる所の業障のつみ皆消ぬるなり、さて攝取といふいかなることゝるをといへり、この光明の縁に逢奉れば罪障ごとく消滅するに依て、やから衆生を光明の内に、おさめをかるゝに依て攝取とは申となり、この故に阿彌陀佛に、攝取と光明との二つを以て、肝要とせらるゝときこゑたりと御意なされたこれとなりち阿彌陀如來の、誓願大悲の御心ろの働さにて、光明と云ふも實は如來の御心ろなり、そこを

「祖師は佛の心光は無碍光佛の御んこゝろとまうとなり乃至すなはち阿彌陀佛の御心におさめ給ふとしるべし法要一の四十八丁尊號銘文仰せられた、しかれば斯るものしき御心ろの御佛をたのみたてまつることを、歸命尽十方无碍光如來とは御意なされたものなり○歸命とはたのめ助けんとある如來の仰せふしたかひ参らすることなり、故に

「祖師の御言ふは歸命とまふとは、如來の勅命に願ひ奉るなりと、法要一の三七丁尊號銘文

○歸悦まうよ
りたのむと
云事

又た御本書に、この二字を釋し給ふとき、歸の言至也と仰せられたは、雜行雜修自力の中途に滯らず、本願成就の阿彌陀如來に、必至とよりつくこゝろ又歸悦也とい、たのめ助けんとある命令を愛樂で、依投信任せ参らざるはどのこゝろ、又歸悦也とは、心ろの願ひをうちとけて、言に宣述し告たてまつることなり、因て蓮如上人は、歸命といふは、衆生のもろくの雜行をとて、阿彌陀佛後生助け玉へと、一向ふたのみ奉るこゝろなるへしと仰せられた、時ふこゝろを論註に歸命即是禮拜乃天親菩薩既願ニ往生ニ登レ不レ禮ニ然レ禮拜但是恭敬ニ必歸命ニ歸命必是禮拜と御釋なされて、これはもと淨土論の中に、五念門といふことがある、その中、今の歸命尽十方无碍光如來願生安樂國といふ所に三念門の道理があると御覽なされて、歸命とは禮拜門尽十方无碍光如來といふ讚歎門願生安樂國とは作願門と御配釋なされた、その内、歸命を禮拜と仰せらるゝことは、元來天竺の南无の二字に、敬從度我の二つの道理あるに依て佛を禮拜して我を濟度し玉へと申とこゝろに、南无の二字

○度我南
无の翻譯多
さ中み度我
救の名ハ今

家には用ひ
ざるなり

○度我も云
云度我と
歸命とい義
全く違ふ
○後生助け
給へとい歸
命にして度
我非と
○彌陀如來
云云 著主
の安心と起
行との別を
知らざる故此
語を爲と
○注意

のもちまへなり、去に依て南无を敬從と翻譯してもその中おのつから、度我
のこゝろなり、又度我と翻譯してもそこに自ら敬從のこゝろを含むなり、敬
從も禮拜も同意る度我も歸命も同意るなり、故お蓮如上人は、南无と云ふの
衆生の彌陀如來に向ひ奉て、後生助け給へとまふすなりと御意なされた所以
なり、彌陀如來に向ふとい禮拜なり、しかれば此度ひ阿彌陀如來をたのみ奉
て、極樂往生を願ふ人は、身はとゝなはすして禮拜せとも、たのみ歸命の
一念おかのつから禮拜の道理のそなはるお依て、事の縁にさへられて禮拜の
ならぬものは、禮拜せぬとて不足もなしました身業もとゝなふて、禮拜のなる
人ならば、禮拜してたのみへき道理は必然なり、そてお往生を願ふほどの
のが、なんぞ佛を禮すまじき所以のなきこと、かの蓮如上人の、御佛の形に
向ひ手を合せて後生助け給へと申すことにて候ふと御勸めなされは規則の、
この天親菩薩の一心歸命のありさまなり、又た今稱尽十方无碍如來は、直お
天親菩薩の口稱、かの名義と相應するゆへにこれ讚歎門なり、五念の中では

○注意

稱名を讚嘆に攝するゆへに、善導大師も、稱佛六字即歎佛との玉ひ、
祖師も南无あみた佛を稱るは、はめたてまつることになるとなりと法要一の四十
一丁尊號銘文
御意なされた、しかれば今日在座の面々我等も、まつ阿彌陀如來を禮拜して
今度の後生助け給へと一心に深くたのみ奉りたれは禮拜も歸命もそなはりた
れども、何と如來を讚歎し奉ることやら、はめやうも存せず、名義相應とあ
ることも、何が名やら何が義やら辨まへねども、助けの御恩ありかたさの余
りお、南无あみた佛くと稱れば、それかそなはらほめ奉ることになるゆ
へお、讚歎門の道理おかなふと仰せらるることなり、○さて願生安樂國と
は安樂國とはやすくだのしむくといふこゝろで追付け我等か參る極樂のこ
となり

祖師の御釋お、極樂とまふすはかの安樂淨土なり、よろづのたのしみつねお
して、くるしみましらするなりと法要二の四十九
丁唯信文意 御意なされたがこの所以なり、
さてその安樂淨土へ生れたいと願ふことを願生といふ、これとなはら五念の

○作願門の起行なり一心歸命の安心なり之を同そへからそ
○第十八願云云 著者の誤りを傳ふへからそ
○身ぶ禮し云云 三業歸命とは全く是なり

中では、作願門、作願の佛けふなりたいた願ふありさま、その願ひやうの直に。か。の。一。心。に。皈。命。す。る。こ。と。な。り。故。ふ。曇。鸞。大。師。の。論。註。に。願。生。安。樂。國。者。此。一。句。是。作。願。門。天。親。菩。薩。皈。命。之。意。也。と。著。の。さ。せ。ら。れ。た。が。こ。ゝ。で。こ。の。南。無。皈。命。の。出。所。が。第。十。八。願。の。欲。生。成。就。の。文。の。願。生。の。欲。と。願。ど。の。お。も。ひ。き。よ。り。御。助。候。へ。の。皈。命。の。願。は。れ。た。もの。な。り。これ。も。と。本。願。の。名。號。お。成。就。し。玉。ひ。た。る。南。无。の。所。以。れ。ふ。し。て。今日。の。我。等。衆。生。が。身。に。禮。し。口。に。告。し。心。お。念。し。て。た。ま。け。玉。へ。と。佛。け。に。向。ひ。參。ら。と。る。や。う。な。れ。ども。我。が。三。業。の。力。て。は。な。ひ。佛。力。他。力。の。現。れ。な。り。そこ。を。歸。命。者。本。願。招。換。之。勅。命。也。と。御。意。な。さ。れ。た。し。か。れ。ども。纒。に。その。一。を。聞。て。い。ま。た。その。二。を。知。ら。ぬ。人。々。は。何。も。角。も。他。方。く。と。は。仰。せ。ら。る。れ。と。吾。身。を。以。て。こ。と。禮。拜。も。す。れ。吾。口。て。こ。と。申。せ。吾。心。で。こ。と。念。す。れ。わ。が。三。業。の。働。き。を。離。れ。て。何。と。し。て。か。は。佛。道。修。行。が。出。來。る。もの。ぞ。と。思。ふ。もの。な。り。それは。近。く。い。い。ふ。櫓。械。の。方。ら。て。舟。を。動か。す。と。ばかり。知。て。水。の。力。と。云。ふ。こ。と。を。知。ら。ぬ。や。う。な。もの。な。り。い。か。ふ。も。船。の。自。在。を。得。る。こ。と。の。櫓。械。の。

力より外はなひ、向ふの岸へ行くやうに櫓械を動かせば、船が向の岸へ行き、此方の湊へ戻るやうな櫓械を動かすれ、又こなたの湊へ戻る、しかれども、越船蜀艇不能無水浮と、淮南子にもてる如く、何程櫓械を備へても、水が無ての船の自在はならぬ、その櫓械を動かしても、やはり水の力なり、今もその如く、いかに我身を禮し、我口けで稱へ、我意で念するも違はなれど、それは櫓械で船を動かすと、同じ道理で、元來佛願他方の水の浮られて居るゆへ、三業の櫓械も稱禮念の自在を得れ、御慈悲の水を離れては、中々埒の明ものではない、こゝの味ひを會得して、兎角他力廣大の佛恩を憶念して、たゞ御報謝の南無阿彌陀佛

勸導薄照卷十八終

勸導薄照卷十九

集文部

其五

○論註 天親菩薩の淨土論を註釋したるものなり

○頭燃 頭巾の火のつきたるを云
○險難 けわしきなり
○和波 穩かなるを云

吾眞宗の第三祖、曇鸞大師の論註に、易行道者謂但以信佛因緣願生淨土一乘佛願力便得往生彼清淨土佛力住持入大乘正定之聚と著させられた、この文のものと、龍樹大士の十住毘婆舍論の中に、菩薩の修行成就て、難行と易行と二つの道あることを示し給ひた趣を得て、他方信心の道理を御勸めなさるゝ御文なり○まづ易行道といゆきやすきみちと云ふこと、世間の道にもゆきやすき道とゆきかたき、道と差別のある如く、今佛法修行の道に於ても、難行易行の二つか有て、若人願を發して、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲し久く自力の諸行を行して、身も命も惜まずして、晝夜頭燃を救やうか、精進お修むるありさまは、險難なる山坂を歩で行んとする如く、甚だ難行なれども、今信の方便を以て彌陀の名號を稱へ他方の本願に乗じて、生死の海を度り涅槃の彼岸にお到ることは、和波よき船に乗て、順風に帆をあげ、万里の水上市を、たゞ一走にせやく如く智慧の眼めしむる者、いかなるかざたかな煩惱の荷物も、舟の方から度すゆへ、何の世話も苦勞も入らぬ、心易き道理であ

○陸道 歩行をか道をあゆむこと

○信佛 因縁佛号を信する因縁なり
○喜愛 樂なり
○乃 暨乃
○至 同義
○極 促時
○の ちいまる
○こと 短きを云

るに依て、今はその難行道に對して、顯示させられたる易行道の名目なり、こゝを龍樹菩薩の本論に、佛法有無量門一如世間道有難有易、陸道歩行則苦水道乘船則樂と述へ置かせられた、時ふその易行道とは○謂但以信佛因縁願生淨土乘佛願力便得往生彼清淨土と仰せられたことろは、まづ但どの餘縁をからすと云ふて、すべて唯但獨一の四つの文字はみな二つれたる見る兒なれば、余のことなしこればかりと判る時に但と云ふ詞を置くことさて信佛の因縁とい平生各々聽聞ある一念發起の信心のことで、正依の經に乃至一念と説かれ、莊嚴經お發一念信心と云ひ、如來會お能生一念喜愛之心と見へたるありさま、曇鸞和尚の乃暨一念至心者と釋せられ、善導大師の爾時聞一念と仰せられ、祖師聖人の、一念者斯顯信樂開發時刻之極促影廣大難思之慶心とも信又一念信心無二心故是名一心一心則清淨報土眞因也など、信の給ひたる信の一念の端的、かの蓮如上人の御文章に、文正元年の御筆、曇鸞は一念發起入定

○因縁の解
釋甚た非なり

聚と釋し給へりと御意なされた一念發趣が、今の信佛因縁のことなれば、佛
 助け給へと思立つてよろい一念起る時なり是を信佛と云ふ、信は信樂信願信
 受信任等の義なれり、たのもしき阿彌陀如來の本願とさして、疑はそ危ます
 正心まごころお受て、たのめ助ふの仰たすけお隨まもひ、さらし御助け候へと打任て參らするあ
 りさまなりこれを他力の信心といふ、こゝか則ち因と縁と和合して往生の業
 事成辨する場所ゆへに、信佛の因縁と仰せられたものなり、因縁とは、因は
 内に萌もすたねのこと、縁は外より催もよほするたよりのことと、喻へは雪や氷の、
 日の光りにてらされて水となるは、もと雪や氷の方ふ、水なるへき因たねか内
 に萌もしてあるゆへなり、爾れとも何程雪や氷の方に、水となるへき因たねが萌し
 て有ても、外より催する日の照しの便たすけか無ては水ふはならぬ、今我等が此身
 お具そなたる、煩惱の雪や氷が、彌陀の光明の日にてらされて、菩提の水となるこ
 ども、もと煩惱の雪や氷の中、眞如佛性の萌もか有て、終ふ菩提の水となるへ
 き因たねを合あひて居るゆへなり、その眞如佛性の内の因か、無碍の光明の照しの

縁に逢ふて、因縁まよふ和合とる端的を信佛の因縁とは云ふなり、かの和讃に
 无碍光の利益より威徳廣大の信を得て必ず煩惱の水とけ、すなはち菩提の水
 となると仰せられたる味ひを、こゝに引合せてよろこびたきものなり、爾しかな
 がら眞如佛性なと、いへんことむつかしく、自力聖道の法門をさくやうなれ
 ども、これがそなはち我等われらか信心の元本、阿彌陀如來の證りの根源なり、そ
 こを和讃に、大信心は佛性なり、佛性をなれち如來なりとも、又た

祖師の御言ふ眞如といひ一如といひ佛性といふ、佛性すなれち如來なり、この
 如來微塵世界にみち／＼て在すすなはち一切群生海の心みち玉へるなりと
 法要第一巻二
 卷の唯信文意 仰せられたがこのことなり、しかればこの眞如佛性の体たいに現れ玉
 ひたる所が、拜上らるゝ阿彌陀如來の御尊像、この眞如佛性の名お立玉ひた
 所が、今日稱る南无阿彌陀佛の名号、この名号の已や有まふ成なた所か御助け候へ
 の信心なり、故に祖師聖人は善導の釋意を承うけて名号を因とし光明を縁としそ
 れふ信心の業識といふ名を添そへて、我等か淨土に生るゝありさまを、御知らせ

なされた、寔に經の中には法常無性佛種從緣起るとあつて、もと因縁の不可思議なるものなれども、且く祖師の御高判に準して、今の因縁の義を、恐れなから沙汰に及ばし、かの

○長時 常の時と云に同し

○宗師 善導大師をさす引く處の文は往生禮讚なり

執持鈔出たる祖師の御言に、光明名号の因縁といふことあり、阿彌陀如來四十八願の中に、第十二の願は我光きはなからんと誓ひ給へり、これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり、かの願すでも成就して、普く无尋の光りを以て、十方微塵世界を照し給ひて、衆生の煩惱惡業を長時に照し在す、されはこの光りの縁あふ衆生、やうやく光明の昏暗うすくなりて、宿善のたねきざりし時、まさしく報土お生るへき第十八の願因の名号をきくなり、しかれは名号を執持することさらに自力に非ず、ひとへに光明に催さるゝに依てなり、これお依て光明の縁あきざりて、名号の因をうと云なり、故に宗師は以光明名号攝化十方但使信心來念といへり、但使信心來念と云ひ、光明と名号と父母の如くみて子を育ててのこくむへしといへども、子となりていくへ

○能生所生 同義にして生ずることなり

きたねなきには、父母となづくへきものなし、子のあるときそれが爲あらしといひはしといふ号あり、それが如くに光明を母にたとへ、名号を父とたとへて、光明のはし名号のちしと云ふことも、報土おまさしく生るへき、信心のたねなくはあるへからず、しかれば信心を發して、往生を求願するときは、名号もとなへられ光明もこれを攝取するなりと法要第二卷仰せられた、この御文のこゝろに、喩へは父と母との因縁和合して子を生ずる如く、南無あみた佛の名号は父にして能生因、又光明は母にして所生の縁、この因縁は有ても、その子と成て生るべき信心の業識かなければ、父と云ふ名も母と云ふ名も出來ぬ道理であるお依て、信心か内お因して、光明名号の外縁のやうなものと仰せらるゝ趣きて、こゝお自ら二重の因縁が分れて見へる、まづ一重おは、名号が因、光明か縁、さて又一重おは、その光明名号ともに外縁として、信心ばかりを内因と御覽なされたもので、まづ南無阿彌陀佛の名号が、光明と冥合して、衆生の耳に入り心お徹りて信心の内因を生ずるありさま、父の精

○懷孕はらむこと

滴を下すか如く、又光明のこれを恵み養ひて、信を生ずるありさまは、母の受て懷孕するが如く、さて我等か信心の、名号の因に托して、光明の中お攝取らるゝ様子は、かの子と成て生來へき、人間の業識か父の精滴お托して、母の子宮お宿るか如くなれ、一方より見れば名号はうませせての因にして、光明はうまされての縁、又一方より見れば、信心か報土に正く生るへき内因おして、光明名号ともに外縁といゆるゝこと仰せらるゝ意なるへし、こゝを行卷おも、良知無^レ德号慈父^ニ能生^レ因^ニ、無^レ光明悲母^ニ所生^レ縁^ニ、能所因縁雖^レ可^ニ和合^ニ非^レ信心業識^ニ無^レ到^ニ光明土^ニ眞實信業識斯則爲^ニ内因^ニ、光明名号父母斯則爲^ニ外縁^ニ、内外因縁和合得^ニ證報土眞身^ニと、示置かせられたものなり、爾れはさしつけて云ふ時は、信心の業識か報土お生るゝ正因と見られたれども、光明名号の父母なくてはその信心を生ずへき所以もなく、その信心が生せねば、光明名号を父母とも名くへき道理のなきふ、忝や有難や、今我等衆生は、その光明名号の因縁和合して、佛けをたのむ機もなり、一念御助け候

○德号名号を云
○光明土彌陀の淨土を云

○雜行淨土往生の行に非るものを云
○雜修自力の起行を総て雜修と名く種類甚た多し

○如來をたのむとは信

へど頼みて見たれば、もはや娑婆から光明の胎内お孕まれ、追付け淨土の花の臺へ生れて出るばかりなれば、そこを信佛の因縁と仰られたものなり、爾れは今は一も二もない、誰を父とも誰を母とも、一向知らぬ其昔、牛てきたも馬て有たも、吾身お覺へなければ、内外因縁和合して、人間の子と生れて來た、その身くの果報と云ふもの、今日愚癡なる凡夫女人、名号を父とも光明を母とも、一向お辨知を、まことお心は馬牛より淺ましき境界なれども、雜行雜修の余念もなく他念もなく、一念御助け候へと阿彌陀佛を信じ參らせられたれば、それがそのまま、信心の業識を攝取心光の、大悲の子宮おやとされたる場所なれ、知らず覺ねども、娑婆から如來の胎内お包れて居る身の上なるに依て、たゞ往生の近づく日を待受て南無阿彌陀佛

其六

同文
しかれ、以^ニ信佛^ニ因縁^ニ願^ニ生^ニ淨土^ニとは、一念發起して阿彌如來をたのみ、極

佛因縁なり

○願行 成
佛の願成 佛
の行なり

○且暮 あ
さゆうを云

樂淨土に参りたいと願求ること○つぎに乘^{ソツ}佛願力^ニとあるは、たのむ行者の
 力らふ依て往生するふ非ず、ひとへは佛の本願の力に乗して往生するをどの
 ことなり、乗るといふのると云ふ文字、かの龍樹大士の仰せられたる乗船の
 乗の字、舟に乗るの竹輿^{カキ}に乗ると云ふこと、我等に願行の足腰は立ねど
 も、佛の願力に乗すれば、佛の願行がわがものに成てかの清淨土に往生する
 ことを得たてまつる、喩へは今日此御座へ、足の叶はぬ老人が、人^カ負れて
 参る時、負た男のその足が負れ人の足の代^カなる如く、我等も願行の足に
 たねど、一念御助け候へと、他力の肩^カ取付たれば、佛の願行のその足
 か衆生の足の代りに成て、易く往生とげ奉る、なほと何れも同行中、か
 る御慈悲か又と有ふか給銀かひた家來^カ負れ、我生成^カた息^カ負はれて來て
 さへも、太義て有た世話なりしごと、心ろある身は禮を云ふ、それ此度ひ
 我等衆生は、如來大悲の肩^カ掛て、淨土参るとくる身が、御禮を云はず居
 られうか、た、且暮^カ御恩を念して南無あみた佛○つぎに便得^カ往^カ生清淨土^ニ

○本論 十
住論易行品
をよむ

○密益 信
心の徳用に

佛力住持^レ即入^ニ大乘正定之聚^ニとは、さて此文の趣き、一往ふこれを見れば、
 まつ他方信心の人は、死して極樂淨土に往生をとげて、そして佛力住持して、
 さて正定聚の分人^カ召直さるゝことの容^カ見ゆれども、よくよくこれを見れば、
 正定不退は此土の益めて、一念發起の當体^カそこでそのまゝ得ることな
 り、爾れども今はかの、信佛の因縁を以て、淨土へ往生したいと願ひ求ると
 云ふに付て、まず佛の願力に乗して、早速その願の通り淨土へ往生するぞ
 ど、志願満足することを最初へつぎ出して見せさせられたものなり、さてつ
 きに佛力住持^レ入^ニ大乘正定之聚^ニとあれば、往生以後の利益と云ふ様に見ゆ
 れども、理は實に現在の利益なり、ゆへいかなればもとこれ成就の文の、乃
 至一念即得往生住不退轉の意ろゆへ、龍樹の本論にも、稱名易行の道理を明
 し給ふ長行の初ふ、於^ニ此身^ニ得^レ至^ニ阿惟越地^ニとうちだして、そして彌陀章
 の偈ふ、即時入必定とその勝益をしらしめ玉ひたからは、たのむ一念起ると
 き、そこでそのまゝ正定不退の密益を蒙ることなり、こゝを經ふは即得往生

して現顯の益に非ざるを云

住不退轉と説き玉ひ、

祖師の御言ふ即得往生は信心をうればそなはち往生すといふ、すなはち往生

すといふは、不退轉に住ざるを云ふ、不退轉は住すといふはすなはち正定聚

の位に定まるなり、成等正覺ともいへり即得往生といふなりと法要第一巻二の冠唯信文意

御意なされ、法然上人の不退轉とはそなはち現身の利益なりと小經仰せられ、

眞要鈔は今云ふところの往生といふは、強ち命終の時あらずと、無始已來

輪轉六道の妄業、一念南無あみた佛と皈命する、佛智無生の名願力にはるは

されて、涅槃畢竟の眞因始て芽と所をさすなりともあり、又た即得といすな

はちと云ふとならうといふは、時をへたてす日をへたてと念をへたてざる

義なり、されは一念歸命の了解たつとき、往生やかてさたまるとなり、得と

いふはさたまるころなりとも御意なされた、是等の趣から窺て見るときは

命のいまた終らねども、信心開發の場所がすなりと、即得往生不退轉なり、

そこを六要鈔にも即言願義不_レ得_二命終_一潛顯_二信心開發時分入_三正定聚_一と仰せ

○畢竟涅槃の異名なり

○大乘小乘を簡ふ言なり

○无爲涅槃の異名なり

られた、これとそなはち佛力住持のゆへぞある○佛力住持とい、もと法藏菩薩

の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力と相符て差はざる所以あるを以

て、きつと我等と住持て、大乘正定の位にしてなをして下さるゝを住持とい

ふ、世間で寺の住持といふも、その寺を味よふ持とけるといふころ、もし

其寺を持崩して仕回らふなれば住持とはいはぬ、しかれば寺の住持のちから

てもつ、味噌醬油は鹽の方から持ち、有明の灯は油の方から持つ我等か信心

往生は阿彌陀如來の本願成就の住持力なり、この如來の住持力が无ては、中

々一世や二世の修行で正定聚の位入らるゝものでいなひ此下へ此書の第十卷の集喻部へ夜檢校の喻を

入る多却の修行を積まねばならぬ、然るに我等は忝や、一念皈命の當相お、そ

のまま大乘正定聚位、何時命終ても極樂無爲涅槃界で、彌陀同体の証果とは

有ふことていなひ有難ひ仕合せ、こゝを思はゝたゝ余のことはへらめ御報謝

の南あみた佛く

其七

○一形一
生と同一
○諸障も
ろく罪の
ことを障と
云

○專精一
心の相たふ
して余念の
難らざるを
云

道綽禪師の安樂集上西十五下に縦令一形造レ惡、但能繫カ意常佛能念佛スレバ、諸障自然消除ニ定得レ往生トと著スせられた、この文の大意は、たとひ一生の間、惡のかりを造ツクリ重カて居る身の上もせよ、一筋に専ら、阿彌陀如來に意をかけて、常ニ南無あみた佛を稱スれば、もろくの罪障ツミガサマリのつから消滅スて、決定極樂淨土ニ往生するハ、違ヒはなひとある御意ミコトノイヒの趣マツで、則ち祖師の御和讃ミコトノイヒに、この意を和けて、

一形惡をつくれども專精ニこころをかけしめて常に彌陀を念すれば諸障自然ニあハのそコりぬと仰せられた、されは今日の我等衆生ニ、今生一世に惡造るはかりではなひ、無始曠劫以來三界ニ繫縛ケバクして、積重ねたる惡業煩惱、なみや大底のことではなひ、中々此度ニ、阿彌陀如來ニ念ヲをかけ、御助け候へたのみ南無あみた佛と稱へたとて、何としてかは曠劫以來の煩惱の繫縛ケバクか離れられうとぞ、不審を立て、見る時に、こノを道綽禪師ノ、二種ノ解釋ケシを設ケて御捌サされた、一には法ニふは喩、この二種の解釋ケシなり、一ハ法ニ就テて云

○百夫百
人の男と云
こと

ふ時の、まツ阿彌陀如來ノ、佛智不思議智不可稱智、大乘廣智、無等无倫最上勝智と云ふ、智慧を満トクくし玉ヒ、その不思議智の御方ラては、少を以て多とし多を以て少とし、近を以て遠とし遠を以て近くし、輕きを以て重くし重きを以て輕くし、自由自在のはたらきをなし給へは、曠劫以來積重ツクたる煩惱惡業が、多ク重クひとて、苦クなることノ少クもない、みな佛ノの无量無邊不可思議の智慧を以て、御取ツ扱クなスることナリ、さて二ツに喩ヘて云ふ時は、略して七ツの譬タトヘがある、まツ第一ニは百夫の大勢オホセの男トモが打寄ウチヨリ、百年の間掛ケて仕溜シタメたる薪タケを積ツ立て、置テて、豆程マメハタの火を以て焚ヤふ、忽ち見て居る内ニ、焚ヤて仕回マて跡方アトカタもない、なニと百夫百年の間掛ケつて、仕溜シタメたる薪タケなれ、豆ばかりの火で、焚ヤぬ筈ハと云ハれまい、たとひ曠劫已來仕溜置ケたる煩惱の薪タケもせよ、南無阿彌陀佛の火を以て焚ヤくに、焚ヤ尽スさぬと云ふことノいなひ、又第二ニは譬タトヘへは、辨ハたるものを、舟フネのせて順風ユヅリに帆セをあげ、千里の大灘オホナガを越スるに、たト一ハも走行ハシヨク如ク、辨ハたるものならば、何トて一日

○智目行足
智慧を目
に譬へ修行
をわしに喩
ふるなり
○奇瑞め
づらしきと
云こと

に、千里の大灘を、越ゆることは吐ふましとは云はれぬ筈なり、今も弘誓の
船の力らて、智目行足のなへたる根闕な我々も若不生者の順風ふ、南無阿彌
陀佛の帆をあくれ、生死苦界の千里の大灘も、たゞ一走せに越行はせむ、必
と疑ふなよとの御教、さて第三には喩へは至て賤しきものが、一つの奇瑞な寶
物を得て、それを大王へ献上するとき、大王の御意ふ今、これに御褒美恩賞
を給はる時は、暫時の間に富貴ふならるゝ、さるをその所以しらすして、數
十年の辛苦辛勞してさへも、富貴になれぬもの、何とて貧賤のまつしきい
しき身の上が、俄かに富貴になれうぞと、諍ふ道理はなきはづなり、今も
さなからその如く、宿善時至て、南無あみた佛の奇瑞不思議な、無上寶珠の
たからをえて、一念御助け候へど、彌陀法王の御前へ指向ふた所が、彼方の
御意に叶たゆへ不可稱不可思議の、功德の縁を、御與へなされ下さるゝ依
て、昨日まで貧窮無福のいやしきもので有たれども、今日の忽ち大善大功德
の主と成て、本願圓頓の車に乗て、淨土參りを遂奉るゝ、有ふ仕合せではな

ひ、さて第四の喩へふの劣夫のおとりはてたる輩ら、たどひ驢馬お打乗て、
虚空を飛行したいと云ふても、通力なけれの叶はぬに、もし轉輪聖王の、御
幸の御供をする時は、忽ち虚空に飛騰て、自由自在に得ることく、中々今日
の劣はてたる悪凡夫が、自力の驢馬お打ち衆て、淨土の蓮臺へ上りたいとて
思ひもよらず行かるゝことでのなけれども、彌陀招換の御幸に従ひ、助け玉
へと引添て參る時の、忽ち究竟如虚空の大空へ飛行し、神力自在をうるぞと
あることなり、又た第五番に喩て云は、十圍のふとさ索を以て、たゞねぢ
されと云た時は、千夫のあまたの男ども、容易きことは叶のねども、た
どひ童子のたぐひもせよ、劍を揮あけ断とき、忽ち兩つにされはなるゝ
今もさながらその如く、自力の手澤てねぢきることの叶のね、煩惱の大索も
利劍即是彌陀号の、南無あみた佛の光劍を、御助け候へど、ふりあげて断
ときは、忽ち迷ひのきつながされて、即得往生とげ奉る、また第六ふは喩へ
て云は、鳩鳥と云鳥は大毒鳥ふて、一たび水に入るときは、その水の中に

○也 蜂 具類
○忽念々起
忽然念起
ならん念と
は煩惱なり

居る、魚蜂の類ひがみな死ぬる、その時犀牛と云ふ獸来て、その水角を觸るれば、死したる魚が、皆悉く活る、今日在座の我人も、忽念々起の昔、三毒の鳩鳥に逢ふて、もはや法身惠命のいのちも、失脱し身なれども、南無あみた佛の犀角にめぐり逢ふて、みなことごとく、一念發起と活りしひ、これぞまことに、不可思議の宿縁なり、また第七の譬を云ひ、黄鵠のつるを、子安と云ふ男が寵愛して飼置し、その子安か死たる時、死體を墓に葬りしに、件の鳥が墓の上止て子安くと、泣尽して喚たてたること三年の間、終ふ三年目にかの子安が墓の下から活て出たとある、これ見よ絶に鳥の念力でさへこの通り、まして況や此度ひ彌陀の願力をや、彼の纒ふ三年なり、此は五劫兆載永劫、我等か未來助かるべき、縁便りを失ふたことひ、子安か死骸の土の底に葬りて、最早活るへき縁便を失ふたことくなれども、阿彌陀大悲の御念力あて、今宿善のぬくもり出て一念御助け候へと活りし所の偏に、他方の不思議といふもの、然れば一切の方法みな、自力他力自攝

○有碍 衆
生の智惠限
りあるやの
故なり

他攝、千開万閉無量無邊の差別あれ、衆生有碍の識量を以て、佛智無碍の法門を疑ふと云ふは、有ふことでのなひはどか、たどひ一生造悪の人なりともた、不思議の本願ぞと疑ひなく信じ、ひとへに彌陀に念をかけ、南無阿彌陀佛を相續して、順次の報土往生を、仕損せぬ容にするが、その身くの肝要を相究まる

其 八

○久近 遠
近或長短と
云か如し

(第八) 善導大師の散善義、一心專念彌陀名号、行住坐臥不問時節久近、念々捨者は名正定之業と着はさせられた、この御文の大意は一心専ら彌陀の願力をたのみて南無阿彌陀佛を稱へ、行ふも住も坐にも臥にも隔なく、時も處も定めず、念々、捨やらず、常にひまなく稱ふるものを、正定業と名く、是即ち彼阿彌陀佛の本願に願するかゆへてあること仰せらるゝことなるなり、これの今日、命存へある念佛の行者、日夜相續の不行は、た南無あみた佛を稱るが、正と云ふことを御知らせなされたもので、正定

○業 業を
行業とする
とき佛は
なるお定る
に付ての行
業なり定り
たもの業
ふは非す

業とい、正定と云ふは正しく佛けふなるも定ると云ふことより、業とはこれお
二つのことよりあつて、終りに一理に歸することなり、その二つのことよりとは
まつ一には業因果などつゝく時の、たねと云ふ氣味相で、かの正く佛け
ふなるに定まりたる業因は、南無あみた佛の稱名と云ふことより、又た二つ
ふ業行作業などつゝく時の、わざと云文字意て、世間に云ふしわざてわざ
など、云ふわざのこと、すなはち家業の業の字お、今此の業の字をかくも、
世を渡る家業てわざのことなり、すれば、今一心決定して、正く佛けになるに
定たもの、家業所作はた、南無あみた佛を稱るばかりと云ふことより、か
くいへは一つの義理ありて別るゝ容なれども、畢竟は同事で、業行作業には
かのつから業因になる、道理を備て居る、喻への家業はすなりち身過の業因
と云ふ如く、惡ひ手業をすれば惡因を拵ゆる道理、善仕業をなせば善因をな
そ理なる、それは今の業の字を、業因の義と見るも業行の義と見るも同
意なり、時に當流の御勸化では、一念阿彌陀如來を、御助け候へとたのみ參

○釋意 散
善義の意を
云

らすれり、其時佛の方より往生活定なし下されて、塵はかりも疑ふへき所以
なければ、必ずしも此上あり、一聲の念佛も、自身往生の業因とは思ふな、
た、佛恩報謝と思ひて、南無あみた佛を稱へ喜へとある御安心去お依て覺如
上人も改邪鈔お、正定業たる稱名念佛を以て、往生淨土の業因と、計ひ募る
すら、尙以て凡夫自力の企なれば、報土往生叶ふへからすと法要第二卷御意な
され、蓮如上人も、一念の信心發得以後の念佛を自身往生の業とは思ふへ
からとと御誠なされた、しかるに唯今善導の釋意ては稱名念佛か淨土參りの
業とあり、又た法然上人も、往生之業念佛爲レ本と仰せられ、祖師聖人も、
本願名号正定業とも、或はまた
彌陀の本願と申すり、名号を唱へんものを、極樂へ迎へんと誓ひせ玉ひたる
を、深く信して稱るがめてたきことお候ふ法要第一卷三卷未證鈔など、も御意なされた
この相違のいかんと云ふ時、なるほど稱名念佛の一行り、淨土往生の業お
違ひはない、これも阿彌陀如來の本願力を以て、南無あみた佛の法体に、

我等が淨土參りの業因を、成就して置かせられたものゆへに、稱へぬさまから、もとより所行所信の、南無あみた佛の六字の中へ、衆生往生の願行は出来てあるに依て、この六字を信しても行しても、往生の業となるの同事なり、信とると云ふはたのむこと、行すると云ふは稱すること、南無あみた佛と、心ふ念したのみても、南無あみた佛と、口ふ願し稱へても、そのまゝ往生の業事わかものになる、故に法然上人も口にて唱るも名号心ろにて念するも名号なれば、いづれも往生の業となるへしと御意なされた和語証、しかれの四の廿四丁、信し唱へぬ前まへから、本願の名号あり、正定の業か合あはてある、去に依て安心決定鈔あり、この正定業の体は機の三業の位の念佛に非ず、時節の久近を問はざると行住坐臥まはを選ず、攝取不捨の佛体となはち凡夫往生の正定業なるゆへに、名号も名体不二の故に正定業なりと御意なされた、こゝを以て見れば、我等がこれを信するもこれを唱るも、そのもとどこから出るぞといへば、名体不二の南無あみた佛の中から出たものなり、こゝを深く信して唱るなれば、信

○三業 身口意のわざを云

○名体不二 六字名號に攝取不捨の佛體の離れざるを云

○在心云云 之を三在の釋と唱して惡を造ると念佛を唱るとの違ふを顯すと在心は心の違ふことを顯し縁は所縁の境の違ふことを顯し在決定の時を顯し示す

とるも往生の業、行するも往生の業、さらば差別はなひ、その中で善導法然の、多く唱る方よせて勸め玉ひ、曇鸞大師我祖聖人等の、多く信とる方よせて勸め玉ふ、故に論註は下品の往生みな信佛の因縁に依てとげ奉るわけを知らせ、在心在縁在決定の釋を設けて、稱名念佛の頭數、時節の久近多少にのよらぬ、下品下生の十念も、無上の信心に依止して生ずる故に、業事成辨とることを知らしめ玉ふ、依て

祖師聖人も、是名正定之業願彼佛願故と云ふに、弘誓を信とるを報土の業因とされたるを、正定の業と名くといふ、佛の願ふ願ふがゆへとまふと文なり法苑珠林二の卷一 御意なされ、また「本願名号正定業といふは、選擇本願の行因とすへしとなり、要法第一巻一の卷一 御意なされた、しかれば信よよせて勸むると行よよせて勸むると、且く二途にわかれたるふ似たれども、その信必ず行を具し、その行必ず信を含みたれば、信も行も、他力の上への同事なり、爾

○行の名云云
行は難行易
行等の差別
あることを
云ならん

○往相廻向
云云 衆生
唱るとき始
て大行とな
る非と法
体を云へは
正定業の大
行又能稱を

れども、行の名を立つれの方便をかね、信の名を立れば眞實に届るゆへ、教相建立の日は行をささへ立て、衆機を弄引し、安心決得の時は信を要として報土に直入せしむべき筈なり、しかればこの南無あみた佛の法体に、もてより正定業を成就してあるゆへに、信行ともあみな他方の回向なり、そでふ他方の回向なるものを、我物顔み、この稱ふる念佛が、浄土参りの業因なりなると計ひ算らひ、それすなひち自力の企なれば報土の往生は叶ひぬと仰せらるゝことなり、喩へは淮南子の、齊俗訓み竹之性浮、殘以爲牒、東投ニ於水一沈、失其体一也と書たことく、竹と云ふものはもと、水み入るれり浮ものなれども、打割て簾の容みして、束て水の中に入れり忽ち沈む、これその体を失ふゆへなり、今本願名号の南無あみた佛も、この身この儘、たのめは御助け有難やと信して疑ひなく稱れば、往相回向の大行となれども、それをわが機の方に細工をして、勿体なくも本願の嘉號を己が善根のやうに思ひて、唱へ集め束合せて、浄土参りの因みと取扱ふゆへに、忽ち自力の行と

云へは報恩
行なり

なるなり、こゝをよく聞開きて、一念往生治定と了解し、此上は御報謝の南無あみた佛

勸導簿照卷十九終

勸導簿照卷二十

集文部

其九

(第九) 楞嚴院の先徳源信和尚の往生要集に極重惡人無他方便唯唱彌陀得生極樂と着はさせれてたこの御文の大意は、至て重惡人は、た彌陀をたのみ念佛を申して、西方極樂の往生を願ふより外み、成佛出離の縁便のふつとなひぞと仰せらるゝことなり、まづ極重惡人とい、極の至極と云ふこと、重は輕重の重で重輕のと云ふ字、すれば至極重き惡人のと打出し給ひた言、そなひち大經み入三惡道苦毒無量と説かせられ、觀經み、應墮惡道受苦無窮と御演説なされたる趣、身も口も意も、惡はかりを造重

○猛火 たけしくもへたつ火を云

○慳貪 おしみむさばるを云

ねて、死なば決定無間地獄の、もろたつ猛火の中より外ふ、往所をもたぬ自他をさして、極重悪人と仰せられたものなり、さて無患方便とは、左ある極重の悪人は、外に助かる方便のないことにて、まづ布施持戒忍辱精進禪定智慧の、六波羅蜜の修行はといへば、布施の行は性き慳貪おして、おいししいが止めゆへ出来ず、持戒の行は性き放逸にして、ますいさまゆへに出来ぬ、忍辱の行は性き瞋恚おして、いかりはらだつころかあるゆへ成就せず、精進の行はといへば、その性き懈怠にして、うみをこたるゆへ調はず、禪定の行はといへば、その性き散亂おして、ちりみだれやすき心ろゆへ、叶はず、智慧の行はといへば愚痴なる生質ゆへに及絶たり、佛けを造り堂塔伽藍を建立することの、その身貧しければ及はず、経讀むことは不得手なり、禮拜恭敬は不數奇なり、何を未來の便りおと取付くところのなひ身の上、捨たり切れる人柄なれば、そこを他の方便なしと云ふ、爾るところお恭くも、西方の阿彌陀如來は、かゝる諸佛の濟度お漏れ、もはや出離の方便を失ふた

○五劫云云 五劫は思惟の間を云ひ永劫は修行の間を云

る悪人を強に助救んか爲の方便お、五劫永劫の御身勞を遂させられ、南無あみた佛と云ふ本願を御立なされた、そこを蓮如上人も、それ五劫思惟の本願と云ふも兆載永劫の修行と云ふも、たゞ我等一切衆生を、強ちに助け玉はんかための方便に、阿彌陀如來御辛勞ありて、南無あみた佛といふ本願をたてましくして、迷ひの衆生の一念お阿彌陀佛をたのみ參らせて、もろくの雜行をすて、一心一向に彌陀をたのまん衆生を、助けせんわれ正覺とらじとちかひ給ひて、南無あみた佛となりまします、これすなわち、我等かやそく往生すへきいわれなりと知るへしと仰せられた、この強ちお助け給はんか爲とは、強ちとは源氏物語空蟬の巻などお出たることで、文字は強力の強の字にしてつよひとよむ、また強ともよむ、かの世お酒をしるるの飯をしるると云ふ類ひ、否と云ふものを無理おつよくすゝむること、今もその如く一切衆生の方おすゝむてゝろわなくとも、そこを強く強て、無理お御助けなされんとの御方便に、御立なされた本願なり、時にこの方便と云ふことも、

○假設 かりにもふけつくるを云

愚かなる人々は、方便とさへいへい、虚偽のことのやうに、意得差ふて居る人もあるものなり、凡そ方便といふ言ふも、假設の方便と眞實の方便との二つの旨ありて、聖道權假の方便衆生ひさしくとまりての、又ハ方便化身の淨土なりのと仰せらるゝ方便ハ、假設の方便にて假設けたる方便のこゝろ、又安樂佛國お生するハ、無上の方便なりければなど、仰せらるゝハ、眞實をとなはち方便と名け給ひたものにして、二つの意分れたれども、畢竟は方便すなはち眞實にして、佛けの方便に眞實ならざるものハなひ、依て龍樹菩薩ハ易行品に信の方便と仰せられ、天親菩薩ハ淨土論ハ菩薩功方便回向成就と歎せられ、曇鸞和尚ハ論註に、正直曰レ方外 曰レ便と釋し玉ひて、もと法藏菩薩の御心ろは正直一途なるゆへに、一切衆生を憐み玉ひ、己れを外にし玉ふゆへハ、わが身の難義ハ御厭なされぬ、その我身の難義を厭はず、自身を供養し玉はそふ、たゞ衆生可愛や不便やと思召す、正直正路の御心ろ、一筋ハ御成就なされたことを、強ちに助け玉はんか爲の方便にと御意なされ

○外己 我身を後おし衆生を立つることなり

た、依て

○廢立 諸行を廢し念佛一行を建立することなり

祖師聖人の御言にも、信心の方便によりて、となはち正定聚お住せしめ玉ふがゆへなりと法要第一巻二の卷唯信文意、御意なされ、蓮師御一代記の中にも、蓮如上人仰られ候ふ、方便をわろしと云ふことはあるまじきなり、方便を以て眞實をあらはす、廢立の義よくく知るへし、彌陀釋迦善知識の善巧方便に依て、眞實の信をい得ることなるよし仰せられ候ふと御書なされ、また和讃おも釋迦彌陀ハ慈悲の父母、種々ハ善巧方便し、我等ハ無上の信心を、發起せしめ玉ひけりとも著させられた、爾れハ、開て云ふ時の彌陀釋迦二尊善知識等、いろくの善巧方便の御弄引から、他力をたのむ身となりて、極樂參りを遂たてまつることなれど、合していへいその本の、たゞ彌陀一佛の方便法身の御手柄より外ばなひ、そこを今の御言ハ極重惡人無他方便と仰せられ、又た御文章には彌陀の本願を信せしめて、ふつと助かると云ふことあるべからとも、又たこの信とるこゝろも念するこゝろも、彌陀如來

の御方便より起さしむるものなりと思ふへしとも、御意なされたからには、
出離解脱の方便はたゞ彌陀一佛の御恩徳に限り究まる

其十

(第十) 往生要集の中に極重惡人無他方便唯唱彌陀得生極樂と著された、此
文まさしく、往生要集一部全篇の至要なるゆへ、祖師聖人正信偈を御造り
なさるゝ時も、極重惡人唯唱佛とあげさせられ、又た御和讃も

○終版 結
局と云か如
○要訣 肝
要と云に同
○彫置 は
りつけおく
こと

極惡深重の衆生は、他の方便さらふなし、ひとへに彌陀を唱して淨土ふ生
るとのへ給ふと和け給ひた、時にこれが往生要集一部の至要かと思へは、一
代佛經の終版、彌陀本願の要訣、これより外はなひと見ゆる、その子細は、
かの能登の國珠洲郡吼木山ツツノこほりほぎやまと申とは、眞言宗の靈場あして七堂伽藍の聖跡、
すなはち弘法大師の開闢なるが、こゝ舟板ふねいたの名号として弘法大師のみづから
彫置けりざきれし六字名号あり、その傍たはらに四句の銘文を添られたり、その文ふ、極
重惡人無他方便唯唱彌陀定生極樂といへり、すなはちその舟板の名号、往古よ

○權者 佛
や菩薩かか
りに人間と
現われ給ふ
を云

り彼寺に傳はりし室物にて、それを紙しよ印して世に弘通あれり、皆人隠れな
く知る所なり、しかるもその弘法の銘文と、今の源信和尚の御言と、對映ひびくらて
見るも得生極樂と定生極樂と、たゞ一字の差ちがひあるのみあて、その余のまこと
み割符を合せたる如くなり、凡そ弘法大師は、人王四十九代光仁帝の御宇、
室龜四年に御生れあつて、同五十四代仁明帝承和二年三月廿一日あ、六十二
才て入定ましくたどあり、又た源信和尚は人王六十一代朱雀院の御宇、天
慶五年に御誕生なれば、弘法大師の入定より、源信和尚の御誕生までも、百
八年の隔てあれば、在世と在世の年代は百何十年と云ふ、遙かふ久しき程を
經つれば、逢て物語りなされうやうもなく、又た叡山横川の源信僧都が、能
登すみの隅なる舟板の名号を、見聞し玉べき所以れもなけれど、權者と權者との
妙釋、いつれに一代佛經の肝腰、この外はなきぞと云ふことを思合せて、仰
て信し奉るへきことなり、時にこの文の意、至極重き惡人は、外そと助かる緣
便はなひ程ふ、たゞ南無阿彌陀佛を唱へて、極樂に往生せよとのことである。

が、こゝに一つ不審を立て、申さは、弘法大師の義の他の祖師なれば兎も角も、今源信和尚の御言ふは、ちと似合はぬと思はるゝは唯唱彌陀の唯唱の二字、唯唱とはたい唱ると云ふ文字ならずや、爾るふ蓮如上人は、たい唱へては助からぬと常々御意なさるゝ、祖師聖人はもとより、信の一念を旨として、正定の之因は唯信心也とも、また

一向名号を唱ふとも信心あさく往生し難く候とも法要第一巻三仰せらるゝ、この君末燈鈔れ等の御意との相違の容お聞ゆるが、これはいかいと云ふ時に、まづこの源信和尚の、唯唱へてとある御言と、蓮如上人のたゝとなへての助からずとある御言とは、たゝと云ふ文字のこゝるか違て居る、今源信和尚の御言は、ひとへに阿彌陀佛を信して、たゝ一筋に打願きて唱ふるこゝろ、又蓮如上人の御言は、何の分別もなく、虚空に口おまかせ、たゝ徒お唱ふることなり、しかれば今往生要集のたゝの、たゝ一筋のたゝなり、かの御文章のたゝの、たゝいたづらのたゝなり、左ある時の言字のこゝろ大さお違へり、爾れのこと

○佛法大海
云云 智度
論一卷に出
る言なり

の唯稱彌陀とあるは、祖師のたゝ信してと御勸めなさるゝ言と、全く同意にして、且く教相門おつくと安心門おつくととの相違ある分なり、教相門の時はいつも稱る方をさきへたてゝ勸ねはならぬ、是即ち第十七願第十八願、二願並立の教相、師々相承の命脉、少しも違ふ所なひ、もし教相建立の時、信を先へ立てゝといひ、それは名相通護の失と成て、宗意は建立なり難ひ、何となれ、佛法大海以信爲能入とは龍樹大士の高判、經始稱如是者彰信爲能入と、曇鸞大師の註釋、一切諸々の佛法のみな信心を以てこそ入口としたものなれ、八家九宗、その宗旨とても信心を肝要とせぬ教のなひその中へ、こちも信心を本ととるとて、珍しうに打出しても、これの諸法並ふ成て教相は立ぬ故、行お就て難行あり易行あり、聖道八万の法は難行おして行か甚た六ヶしい、こちの淨土の一門は行か易行おして心易ひと、たゝ南無阿彌陀佛を稱るばかり、十聲十りとも一聲なりとも、臥てなりとも起てなりとも、心お住せ身に隨ふて、たい稱るより外に、勞しき行のなひが、

念佛の一門と示したるものなり、去り依て祖師聖人も、教相の旨より仰せらるゝ時は、いつも稱る方はかりなり、依て御本書を御造りなさるゝ時も教行信證と御つらねてされて、まづ眞實教の次に行を出し行の次は信を顯はさせられ、畧文類にも

如來本願顯稱名と、また唯信鈔文意にも、

とてお稱名の本願の、選擇の正因たること、悲願に顯はれたりとも、

また口稱を本願とし玉ふとも、法要第一卷二ノ卷また尊号眞像の銘文などおも、

往生の要に、如來のみなを稱る不遍たることなしと法要第一卷一ノ卷また唯信鈔文意お

も

ひとへにみなを稱る人のみ、みな極樂淨土お往生すとなりとも法要第一卷二ノ卷仰せら

れた、これみな數相門の方にて、稱名易行の至極を御勸めなされたものなり

然らぬ唱へぬの參られぬ極樂かよといへり、一聲の稱佛には及はすとも、信

する一念起る時、そのまゝ攝取の光益に預かることなり、故に安心門の時は

○口稱 稱名の行のとなり

○一形 生涯のとなり

一念發起即得往生と云ふより外なし、その一念發起の信心の一形相續してゆくものは南無阿彌陀佛、然ればこの唱名は選擇本願の行を行するなれり、たゞあひくえ明暮お南無阿彌陀佛くと唱へて往生するのかりなり、左ある時の往生の最初の一念おて治定すれば、その上お唱名は佛恩報謝と云ふより外なし、故に信の一念に即得往生と取定めて、その後ち命ながらへあらん限りは、たゞ御助けの御恩嬉しや南無阿彌陀佛忝や南無阿彌陀佛

其十一

(第十一) 法然上人の選擇集お南无阿彌陀佛往生之業念佛爲、本と顯はせられた、この御文は、この度我等か淨土參の業因となるものは、たゞ南无阿彌陀佛ばかりと云ふことを御知らせなされたもので、まづ最初に南无阿彌陀佛とある六字は、所信所行の法体おして、たのまれての向ふの佛け、となへられての佛けの名号、となへち我等が苦惱を除て下さるゝ、他力の大法、これを信するを信佛とも信心とも云ひこれを稱るを唱佛とも唱名とも云ふ、

○念佛 又
佛名を憶念
すると云こ
るより念
佛と申と

又たこれを唱念とると云ふこゝろより念佛とも名け、或はこれを憶念とると云ふこゝろより憶佛とも申と、今の往生の業あり念佛を本とすとあれ、一切衆生の淨土參りの業因は、たゞ稱名念佛が先であること、仰せらるゝ御意なり、誠に阿彌陀如來の御本願は、南无阿彌陀佛を唱へん者を、極樂へ迎へ玉はんとの御誓願なれば、これを信して唱るより外に別の子細のない、時お一つ拒を入れて申さは、祖師聖人は信心を本とすとある御勸化、今法然上人の念佛を本とすると仰せらるゝ、此相違のあるはいかゞと云ふ時、これを捌はくに、まづ初に念佛と信心との異同を辨じてから、次に黒谷と我祖との一轍なる趣きを示さん、まづ念佛と云ふこと、諸經諸論の上に於て、數も限りもなき程説てある名目で、強ちに口ちに唱へる南无阿彌陀佛のことばかりを念佛と云ふにのあらず、すでお淨土の觀經の上お於ても、即見十方一切諸佛、以見諸佛故名念佛三昧と説がせられたは、觀念のことおして、定善の觀念成就して、十方一切の諸佛を見たてまつれば、それが念佛三昧と云ふものと

○理の念佛
眞如佛性
を念するを
云

○事の念佛
佛の三十
二相八十隨
形好等を觀
念するを云

○古今指定
古今の諸
師の誤りを
たいし定む
るを云

○弘願 第
十八願をさ
そ
○念佛 憶
念稱念の二
義

の經文なり、故に唐日本の智者學者達も、いろ／＼に名をつけて、或は理の念佛事の念佛、或は觀念の念佛口稱の念佛と、簡別して御覽なされたものなり、依て觀經の念佛も、天台等は直お觀念の念佛と見込んで聖道門の御經おせんとせられた、そこを善導大師深く憤り給ひて、十方諸佛お祈誓をかけ、夜毎／＼に西方彌陀の直々の御指南を受け、古今指定して、觀經の底を振ふて、いよ／＼口稱念佛と御決着なされたものなり、その善導の踵を繼て御出なされし法然上人ゆへお、唐我朝にもろ／＼の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、又學文をして念の心を悟りて申す念佛もあらず、たゞ往生極樂のためおは、南无阿彌陀佛と申して往生とると思ひ取て申す外おは、別の子細候はずと、もはや口稱念佛も口稱念佛かな、とゞぎあげたる餘行の雜らぬ、弘願他方の念佛と、力らを尽して御勸めなされたか法然上人なり、然らはこの、往生之業念佛爲本とある念佛は、口お南无阿彌陀佛と稱へるばかりのことかといへば、さら／＼左にのあらず、まづ今の念

佛の二字は、經の中一一向專念無量壽佛と説かせられて、念は二念をかけし一向專念、佛ハ二佛を並へト彌陀一佛と、あみた佛を一筋に、助け玉へと深く念とることを念佛と云ふ、すれは念佛の二字は直に佛を念とると云ふことなり、心ろに佛を念するゆへハ口に南無阿彌陀佛と稱るなり、口ハ南無阿彌陀佛と稱へすトも心ろに念するばかりをも念佛と云ふ、故に觀經の下品下生ハ、五逆十惡具諸不善應墮惡道の大罪人、臨終ノたへハ火の車の迎ひを受けて、曰ハ地獄へ墮なんとする時、善知識あつて救へて、汝ち地獄が怖ろしくは早く念佛せよと勸められたトも、此人苦逼不遑念佛とあつて、此の人苦しみ逼て中々佛を念することが叶なんだ、その時善知識教をかへて汝ち念とることを能ハすんは、まさハ無量壽佛と唱ふべしと勸められたトある、爾れはこの時の經文に不遑念佛と説てある念佛は、口ち稱ることハハあらと心ろ念することなり、心ハ念する方が先なる故にぞ善知識も念せよと勸められたトも、最早や地獄の火車は、煌々然と燃舉て目の前へ現れる、阿防羅刹ハ

○不遑念佛
此念佛は彌陀の戒定惠解脱々々智見等を念とるを云然

るハ此念を信心のとにとるハ穩ならす

黄と來る、吾身は病の苦痛に逼まる、五臟六腑は碎くたる容に堪難く、此世彼世の際へとんと漕寄せたれは、心定か念とることも叶はねは、南無阿彌陀佛と、苦くしさ余ありて稱へた時、その稱ふる心根は、助かりたひか一念ぞと云ふことは、阿彌陀如來ハ御合あひゆへ、息いのきれるを待受て、金の蓮華ハ打つけて極樂淨土へ迎取て下されたトある、爾れは口ハ唱るも念佛、心ろ念するも念佛なれ、信心を離れたる念佛でもなく、念佛を離れたる信心でもなハひ信心の体も南無阿彌陀佛、念佛もまた南無阿彌念佛なれ、念佛を本とと云ふも信心を本とと云ふも、つままる所はたハ一句の南無阿彌陀佛なり、故に法然上人は和語灯四口にて稱るも名号心ろ念するも名号なれ、いづれも往生の業となるへしと御意なされた、かゝる所以れあるを以て、唯今の選擇集にも、まづ最初ハ南無阿彌陀佛とその体を打出して置て、そして往生之業念佛爲本と顯はさせられた、然れハ念佛は、佛の法身を憶念する念にも非と、佛の相好を觀念とる念も非ず、たゞ名号を稱念とる念なり、

○相好 三十二相八十隨形好なり

故に法然上人の、念佛と云は佛の法身を憶念とるも非ず、佛の相好を觀念とるにも非ずと云ふ心を至して専ら、南無阿彌陀佛の名号を稱念とる、これを念佛とは申すなりと和語仰せられた、然れば畢竟他力の家を云ふ時は、信心も念佛も同事なり、因て祖師聖人も念佛衆生は金剛の信心を得たる人なりと法要第一巻二ノ卷御意なされ、安心決定鈔も、念佛と云ふは必しも、口ちに一念多念証文、南無阿彌陀佛と稱るのみ非ず、阿彌陀佛の功德、我等か南無の機に於て、十劫正覺の刹那より、成し入り玉へるものと云ふ信心の起るを、念佛と云ふなりと着はされ、また蓮如上人は直に合点のゆくやうに、當流に阿彌陀をたのむを念佛と云ふなりと仰せられ御物實如上人の御言も、信とると申すも信心と申すも、彌陀をたのむこと一つにて候ふと御意なされた、御一しかれは兎角御當流での念佛と云ふ信心と云ふも、一心に阿彌陀如來の御助を候へたとのみ奉て、南無阿彌陀佛と稱るより外に、別の子細はないと聽聞申されたがよひ、その最初一念たのむ時、往生そのまゝすむなれば、此上はた、御

○一期一生涯のとな

恩報謝の爲と思ひて一期の間懈怠なく、何の中からも南無阿彌陀佛く、
其十二

(第十二) 黒谷の選擇集に、南無阿彌陀佛御往生之業念佛爲本と着はさせられた、此文のころの粗あら上に申した通りなり、これに就て祖師は信心か本ぞと御勧めなされる、念佛か本と仰せらるゝ、この相違はいかゞぞと云一段、また念佛と云ふも、信心と云ふも、畢竟同所へ落着くぞと云の義理は、前座を畧して示した、時念佛も信心も同事ならば、信心爲本となりとも、念佛爲本となりとも、たゞ一種ひとかたでもむべきものを、何故に法然上人の、念佛爲本と御勧めなされるものを、祖師は信心を爲本と仰せらるゝぞ、何さま違ふてある證據には、法然上人の、いつも唱へる方を先へたて、御勧めなされるゝ、又た我祖御開山聖人は、つねに唱る方よりまつ信心の方を先へたて、御勧めなされるゝ、この相違はいかゞと云ふ時に、成程をなし高祖の中ても曇鸞和尚や我祖聖人は、信心くと仰せられ、又た道綽善導法然さまの、

○半輪 半分の月を云

いつも念佛くくと仰せらるゝ、この差たひのある所以は、觀經の説相によると大經の説相よよるとの差別のある分なり、觀經に依ても大經に依ても目付け所は、たゞ第十八の弘願一つなり、去り依て弘願念佛とも弘願の信心とも云ふなり、喩へは山に依て月を見ると水に依て月を見るとの差別のある如く、峨眉山月半輪 秋と、東の山端へつるくくと半輪出掛る容子をほめた山の月、影入ハツ平羌江水ニ流るとたたりとこの光の水の面おもてへなかれわたつた様子をほめた水の月、月に二つになれども、見所に依てはむる言ひか違ふ、まづ觀經でいつも念佛くくと見へて、或は念佛衆生攝取不捨の、或は於現身中得念佛三昧の、或は故名念佛三昧のさては常説念佛の皆説念佛の、又たの教令念佛の不違念佛の、或は若念佛者當知此人是人中ふん陀利率なんどして始めはじめから終りまで念佛仕合ひて説かせられたものゆへに、法然上人のこの言ふ依て念佛くくと仰せらるゝ、又大經のいつも信心くくと説かせられて、まづ第十八願の至心信樂とあるが、信心の根本なるに依て、人有至心未道と説

○ふん陀利 梵語おして白蓮と譯す

○言弘願云 云い義分ぶんに出る言なり

き、或は至心發願欲生我國の、或は至心回向欲生我國の、或は歡喜信樂發菩提心の、或は歡喜信樂修菩薩行の、さては聞其名号信心歡喜の、乃至一念至心回向の、さては其有至心願生彼國の其有至心欲生彼國の、又たの歡喜信樂不生疑惑の、至心願生安樂國者の、或は歡喜信樂の、專心信受の、信樂受持の、應當信順のと、一部始終がみな信せよくと、信の一字を旨として説かせられた大經なるに依て、祖師はこの御言ごごんふ本もとて、信心くくと仰せらるゝしからの曇鸞大師や祖師聖人は大經に依て觀經は依らせられぬか、善導大師や法然上人の、觀經に依て大經の仰らせられぬかと云て見れば、さらく左様のことには非と、善導大師は言い弘願者如説い大經と、彌陀弘願の一件いっけんは、大經にある通りぞと讓ゆるて置かせらるゝ、法然上人は、觀經の裏うらより大經の表おもてを照して、機うけの眞實より法の眞實へ入らせられ、我祖聖人は、大經を前に立て、觀經を後うしろにひかへ、法の眞實へ機うけの眞實を取入れさせらるゝ、かく云ふての慙なやかなる人の耳へは落着きおくからふ、まづ法然上人の觀經の裏うらよ

り大經の表を照して、機の眞實から法の眞實へ引入れさせらるゝその所以は
 近く喩へて云はゞ、一つの兩面鏡みにて合点をせられよ、兩面鏡といふもの
 は、表の方を見れば正直に見せる常の鏡なれども、裏の方を見れば、中凹
 磨立たるものゆへに、向へは顔か大きうなつて見ゆるものなり、これの髻な
 どをぬく時お、こまかな産毛の頭までも見透様お方便して拵らへたるものな
 り、今もその類て觀經と大經とは、もと一枚の兩面鏡の如く、裏と表の違ひ
 のある計りあて、大經の表の方で、本願のありさまを正直お説顯はせられ
 たもの、觀經の裏では、衆生の機の方の、煩惱惡業の髻をぬかん爲お、心の
 底に隠し置たる産毛の頭ほどの罪までも、残らず見ゆる様に方便して説かせ
 られたが觀經なり、そこを觀經おは有る方便と御演説なされた、しかれは是
 の方便から眞實へ入ると云ふもの、近ふいはゞ、不法義なるものお寺参りを
 勧むる時は、有難き説法かある参り玉への貴き本尊なり参りて拜禮あれどの
 勸めは埒明かぬお依て、さてもよき辨舌を面白き説法ぞ、はて夥しき群集

○有る方便
 化身土卷
 云諸佛如來
 有る方便と
 云は則ち是
 定散諸善の
 方便の教た
 ることを顯

すと釋し玉
 へり

なり、さてあの寺の奇麗な寺じやの、何ともいへぬ勝れた景色しやのと、い
 るくの方より勸め込んで、参らせさへすれば、貴き佛も拜む有難き説法
 もきくことなり、是かすなわち方便から眞實へ引入れたと云もの、法然上人
 の御教化も、有難からふがあるまいがまつ念佛を申せ、念佛だも申せは彌
 陀の願力で助けさせ玉ふぞと、疑ひさへなければそれかすくお信心と仰せ
 られ、是は教相建立門の方と云ふものなり、また御開山聖人の大經を前に立
 て、觀經を後にひかへて、法の眞實へ機を眞實を取入れさせらるゝと云ふの
 いかなることなるなれ、喩へは女中の髪を結時に、鏡を 面前に立て、そ
 れへ移して結て居れども、後の髪か昆布汁見るやうに亂れて居るやら、曲毛
 の容子が蝸牛の這た如くお屈てあるやら、前の鏡ばかりおては見ぬぬに依て
 それがために今一面鏡を出して、後ろに扣て髪や曲髪の模様を移し、その鏡
 に移りし影を、そのまゝ前の鏡へ取入れて見れば、前も後ろも明らかに知れ
 る、今もさなから其如く、まつ大經の鏡を前お立て、置て、さて觀經の鏡を

○難行三
學六度の行
を云
○易行稱
名一行を云

後うしろみ扣ひかて、我等か機うしろの方の後うしろ闇くらひ煩惱の髪の毛の容子、散亂蠢動のもつれみたれし心の底そこを移し、それて大經の法の鏡へ取入れて、かゝる機を助け玉ふ阿彌陀如來の本願をど、法と機とをは詠なげ合あせて御勸めなさるゝが、御開山聖人の御勸化なり、是が即ち眞實から方便を知らしめ給ふありさまにて、てうど如來へ御禮を申さふ、有難き説法を聞かふと思て、參て見れば莊嚴も拜む參詣も見ると云ふ様なる類なり、頼みますれの御助けと、一念の信心疑ひなく了解して見たれの自ら佛けの御慈悲がたのもしふ成て、南無阿彌陀佛と御念佛か願ひれひで叶ひぬ、是の安心門の方と云ものなり、いつとても建立門の方では行か先のちふて信が後、また安心門の時の信か先にて行は後なり、その子細は建立門の時に信を先にしては建立のならぬ、佛法大海うみ以て信爲す能入とあれば、一切の佛法みな信が先なるに依て、行に就て難行易行と分けて、よそのは難行なれども、こちらは易行あして臥ふたら臥ふながら南無あみた佛、起たら起ながら南無阿彌陀佛、十聲にても、一聲にてもその差別はないぞと勸め

たものなり、また安心門に立入て見る時は、稱へぬの參られぬと云ふことおは非ず、最初信の一念起る時、願力の不思議より、佛体の方にて往生治定、その信の口業へ出たる南無阿彌陀佛なれば、念佛を本と云ふも信心を本と云もの、畢竟の同事ふて他方回向の南無阿彌陀佛たゞ一つに落着くことなり、爾れば御座の同行中今は一も二もなひ程ふ、早く阿彌陀如來をたのみ參らせ、その後命なからへあらは、たゞ一筋お御報謝の南無阿彌陀佛

勸導薄照卷二十六尾

明治廿六年九月一日印刷
明治廿六年九月十日發行

定價金二十五錢

編纂標

愛知縣尾張國知多郡半田町五十五番地
阪田 慈香

發行 者 西村九郎右衛門
京都市下京區下珠數屋町東洞院西入橋町八番戶

同 出雲寺文次郎
京都市下京區三條通堺町西二入樹屋町四番戶

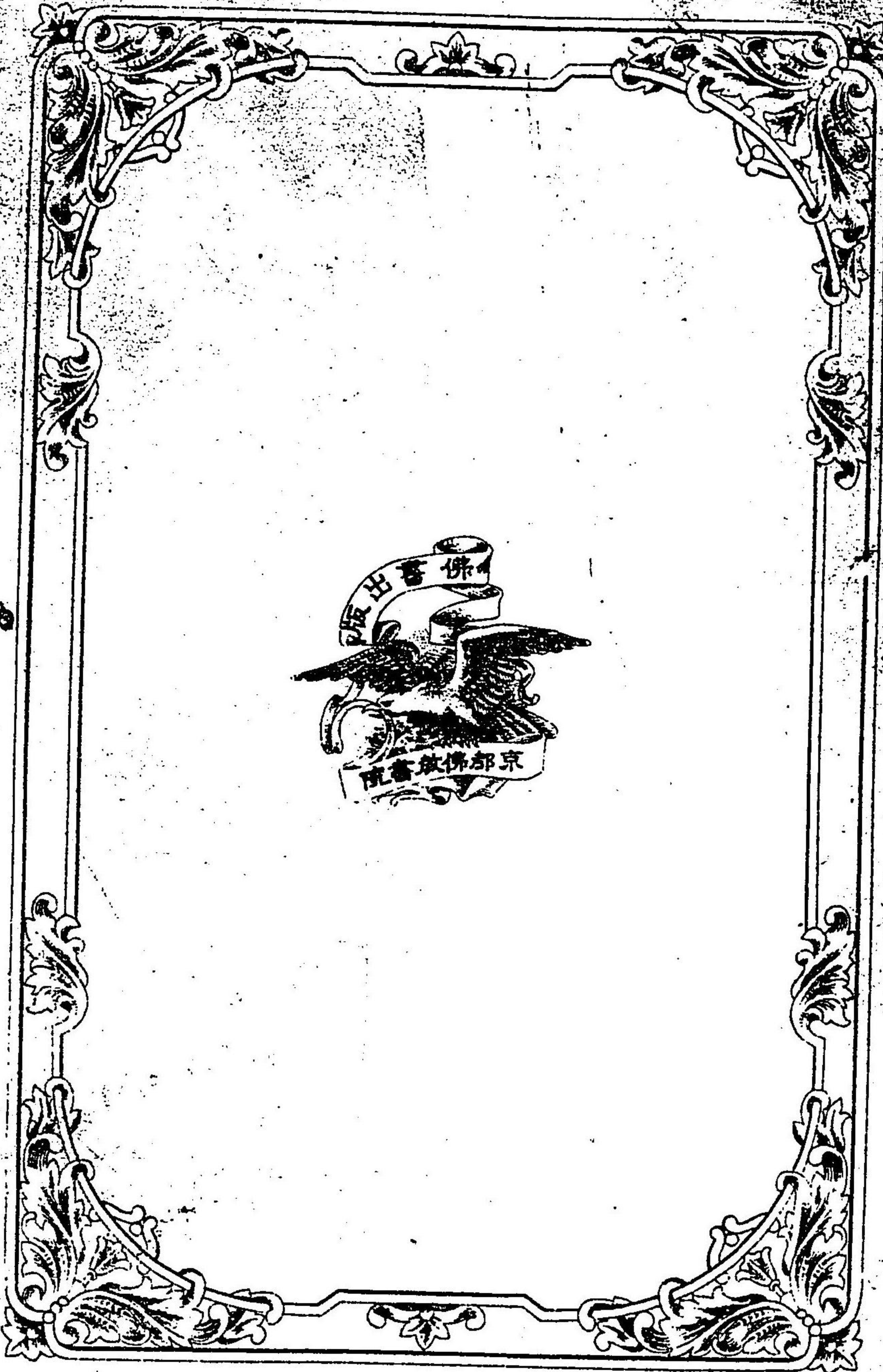
同 澤田友五郎
京都市下京區五條通高倉東二入盤籠町卅番戶

同 藤井佐兵衛
京都市下京區寺町通五條北入橋詰町廿五番戶

發行 所 興教書院
京都市下京區油小路御前通下ル王本町六番戶

印刷 者 西村十次郎
京都市五條通麩屋町西入本覺寺前町卅七番戶

版權
所有



北京佛敎書院